

Just

an

Impulse

「リーダあなたのせいでこうなったんでしょ？それに元はと言えば、ゼノ、あんたの自業自得なんだから。つべこべ言わない！」
ママに勝る者は無し…。

悪夢だ。

-Step 2-

「お前があんなことしなかったら、今頃、こんな泣きそうなことしないですんだんだ。」

俺はリーダーの部屋のクローゼットの前に立って、涙ながらにそう呟いた。

「あんたが悪戯するのが悪いんでしょう！？ママの言う通り、自業自得よ。」

早く着なさい、とリーダーは俺に服を投げつけた。細身の俺はリーダーのパンツを何とかはくことができるだろう。完全にシルエットが女のジーンズに違いないってわかるやつでも。

意を決して脚を通した。

「なあ。俺が、こんなを着て、学校に行ったら、どうなるかお前想像できるか。

お前がまぶたにニセモノの目とヒゲ持ってるのより、よっぽど悲惨じゃねえか。俺の人生終わりだ。友達すら逃げてく。」

言ってもしょうがないとわかってながら俺は呟いてファスナーに手をかけた。

「……………閉まらない…。」

キツくても、たった5センチもないスーパーローライズパンツのファスナーが、閉まらなかった。

俺にはリーダーには無いモノがあるせいで。

クソ、デカ尻とかからかってたけど、実はそうでもなかったらしい。

「嘘でしょ？それ一番大きいヤツなのに！」

「嘘だろ！？」

「こんな時に嘘ついてどうすんのよ。もう、遅刻寸前だっていうのに、勘弁してよね！」

「それはこっちのセリフだよ！なんでこんな自分の限界ぎりぎりの細身のパンツで見栄張ってんだ。」

バシッ

「痛ッ！」

「そんなこと言うと、協力してやらないから。」

「わかったよ！なにか他に無いのかよ。俺にスカートはけてのかよ。学校中の笑者になる。一生。

俺が卒業するまできっと俺のあだ名は『オカマちゃん』かなんか言われるんだ。

いや、本当に一生かも。」

青くなった。卒業したからって変なあだ名で呼ばれてたことを即座に忘れてもらえるわけじゃない。

「それよ！」

絶望的な気分になった時に、リーダーはなにか思いついたように笑顔でそう言った。

ママがこういうこと言う時はたいにいいこと言わないもんだったけど、リーダーの場合そうじゃなかった。

「何！それって何！」

「あんたってバレなきやいいのよ。」

「は？」

「どうせ学校に行っても友達もクラスも避けてサボるつもりなんでしょ？」

「アレ？どうしてそれが。」

「わかるわよ。先週私がそうだったんだから！」

思い出したように泣きそうな顔をしたリーダーの言葉に、初めて俺がやらかしたことがちょっとヤリスギだったことを思い知った。

悪いことしたかもしれない。俺は未然に防ごうとしてるけど、リーダーの場合、今は学校中が顔の落書き事件を知ってるんだ。

「ゴメン。悪かったよ。」

「あんた、それ、本気で言ってるの？」

「言ってるよ！ちょっと、この間はやりすぎた。」

「この間、だけ？……………もういいわよ。急いでるんだから、早くこれ着て！」

リーダーはクローゼットにかけてあった服を掴むと俺に投げて来た。

「こ、これスカートだ！」

「だから言ったじゃない。あんただってわからないように変装するの。」

「え……………？」

一瞬間を言われたのかわからなかった。

「考えてみたら、私の弟が私の服来て笑者になるんだったら、全然私良くないじゃない。他の子の服着るならまだしも。だから、あんただってバレなきや問題無いわけじゃない。だから、女装するのよ。で、サボっとけてこと。私はあんたと違って、私と同じ目に合わせるほど、性格悪くないの。」

「女装？」

「嫌なら裸で登校しな！」

「わかった。わかったよ。ただし、本当にバレないんだろうな？これでバレたら本気で一生モノだ。」

俺は他に選択肢なんかなかったし、観念してリーダーが投げた服をきることにした。生まれて初めてスカートを。

「どんなもんよ。」

フフンと自慢げに言ったのはリーダだ。

鏡の前には女の子が座ってた。目元はも口元も俺そっくりの、女の子が。

「嘘だろ。俺チョーいい女じゃん。」

リーダなんかと比べ物にならないな。

「勝手にそう思っとけば。任務完了、私の役目は終わったわ。」

俺の髪の色と同じ赤毛のウィッグにクシを通して、リーダは自分のカバンを持った。

今俺はいつもより何倍も髪が長くて肩まである。スカートははいてるし、脚を隠すためにロングスカート、おまけに化粧までしてる。俺のまつ毛なんかもう、バッサバサ風でも起こせそう。

「おいおい。待てよ！このままロッカーに行けば俺だつてバレンじゃんか！あ、待て、喋ったらおしまいじゃないか！！！」

「ロッカー行かないで、誰とも話さなけりゃいいでしょ。そこまでフォローしてらんないわよ。じゃ、学校でね。遅刻するわよ」

リーダはサラッとそう言うと部屋から出て行った。

「待てよ！！」

俺も、もたもたしてられなかったから、自分の部屋から急いでカバンを掴むと家を出た。

今の格好に、カバンが酷く似合わないと思ったけど仕方なかった。

なにか言おうと思った。だけど、思ったよりもビックリしすぎて、声の出し方すら忘れてしまった。
怒るべきなのか、罵倒すべきなのか、どうしていいのかもよくわからなかった。
目の前の金髪のハンサムは、そんなこと気にしてないのか何なのか知らないけど、じっと楽しそうに俺を見ていた。
「驚かせるつもりは、なかったんだけど。あまりにも君が綺麗だったから...起きるまで待ってたんだ。」

は！？

今度こそ死ぬ、と思うほど予想すらないセリフを耳にして俺は何を言っているかどころか、何から対応しているのかわからなかった。
俺が...綺麗？
まあ、そう言われることは、結構よくある。
そろそろ青年って言われる歳なのにまだ少年って言われる外見だけに、可愛いとも言われるけど、どっちかっていうと顔の作りが繊細でガッチリした体型でもなかったから綺麗だって言われるんだ。それにオレンジ色って言っていくらい明るい赤毛がよく似合ってるらしい。俺もそう思う。
2学年くらい下の生徒に混じったら間違いなく一番のチョーハンサムガイだ。
残念だけど、歳相応に見られない俺はガキ扱いされることが多かったけど。
そんなことよりも、問題は目の前のこの学校中で1、2を争うブロンドハンサムヤローだ。
なんで男の俺がコイツに綺麗だって言われて寝起きキスされないといけないんだ。
「名前が聞きたかったんだ。見たことなかったし。同じ学年？それとも下？もしかして転校生？」
頭、おかしいのかこいつは！
否、皆のアイドル、アベルは実はホモだったのか？
そんな秘密知ってみろ、俺の学校生活ガラリと変わっちゃうぜ。こいつのコネでチアリーダーに急接近。
そう思ってふと自分の足に毛布がかかっているのが見えた。
ご丁寧に、毛布なんかまで持って来てくれて俺がどこの誰か聞くまで待ってたっていうのか。

「！」

ハッとした。違う。毛布じゃない。俺の『スカート』だ！！！！
やっと落ち着いたと思った俺は、また心臓が止まったのを感じた。俺、今、外見だけは男じゃなかったのを思い出した。
ということは、俺のこと女だと思ってる？
そう思うと胃のあたりがモヤモヤするのと同時に、半分疑問がスッキリした。
目まぐるしいくらいに驚き続けている俺に気づいてないらしく、アベルは何も言わない俺のことを気にしてるわけでもないみたいで、話し続けた。
「俺、アベルって言うんだ。」
知ってる。
俺は心の中で呟いた。学校で彼のこと知らないヤツはまずいないと思う。
まず、女の子はみんな彼のことは知ってる。興味あるにしろ、無いにしろ。有名だからだ『カッコイイ』っていうので。
で、俺はリーダが彼に夢中だから知ってる。
リーダの日記にはしょっちゅう『アベルがどーの』だとか『今日のアベルは』だとか。そのくせ一度もまともに話したことなんかないんだ。
姉の日記盗み読みしてるのかって？
ああ、してる。もちろん。
「君に一目惚れしたんだ。」
じよ、冗談だろ。俺は男だ。
リーダの女装マジックは最強らしい。アベルの視線はかなり本気らしく、一瞬背筋がゾクとした。
急にさっきのキスを思い出して、また頭がパニックになりそうになった俺は急いで立ち上がると、アベルを押しつけてその場から逃げ出した。
「待って！」
誰が、待つか。お前は幻を見たんだ、アベル。こんな夢のようなイイ女には二度と会えないぜ。

俺が男だってバレることがないっていうのが証明されて、今度は生徒と先生からじゃなく、アベルと先生から1日逃げることになった。

-Step 4-

「ゼノ。今日はどうだった？」

嬉しそうにそう聞いてきたのは、もちろん、リーダだ。

「ああ、おかげさまで楽しくて泣きそうだったよ。ありがとう。本当に。チョークソマジで。」

家に帰って来てキッチンでつまみ食いしてたリーダは俺を見て随分嬉しそうだ。

何が楽しい？ああ、楽しいよな。先週の仕返しはこれでバッチリだ。借りもできたし、これの仕返しをしてやりたかったけど、リーダがいなかったら今頃明日学校行きたくないどころか転校したくなってただろうし、向こう数週間は大人しくしてるっきゃない。

「まあ！ゼノ！！なんて、なんて可愛いの！」

呆れてため息が自然に出て来た時に、やたらとテンションの高い声が邪魔をした。

「ママ！」

キッチンでつまみ食いしてたのはリーダ。普通にお茶してたのはママだ。

「そうでしょう？ゼノは元がいいから、この手のことならゼノのベースと私の技術があればお手の物よ。その辺の女の子より可愛い。」

「カメラ持ってくるわ。そこにいるのよゼノ！」

「ママ！！冗談じゃない！！ママってば！！」

言っても聞かないのがママだ。俺の文句なんか全く聞こえてないみたいで、ママはさっそくカメラを取りにキッチンから走り去ってしまった。

残ったのはリーダだけだ。

「クソッ。今日は散々だ。」

「私は楽しい1日だったわ。あんたが学校のどこかでその格好で惨めな顔しながらトイレも行けなくて困ってるんだわって思っただけで、トイレはどっちに入ったの？」

リーダは本当に楽しそう。そうだろう。わかってる。

「聞いて驚くな。今日だけできること。それは、女子便所に入る。」

そして、更衣室だ。

食べ過ぎたの、あいつ太ったの、なんだかんだ。全然面白くなかったけど、見るものは～...

バッチリ！」

へへっと言ってやった。これだけは今日素晴らしかったことだ。

「あんたって、サイッター！」

「いいだろう！？役得ってやつだよ。」

「それは役得って言わないわよ！私のアイデアで女子更衣室に堂々とするなんて有り得ない！」

「凄いぞ。マジで男だってバレないんだ。」

悔しそうなリーダの顔に、やっと心が生き返った気分になった。朝から最悪な気分がやっつと晴れたってかんじだ。女子更衣室を覗いてもここまではいかなかった。

「ゼノ！！そこにじっとしてなさい！！」

うっかりその場を去る機会を逃してしまった俺は、ママに捕まった。手にはボラロイドカメラだ。勘弁しろよ。

「ママ。頼むよ。俺だってバレないために変装したっていうのに、なんで証拠を残そうとするのさ。」

ママだって、息子が女装してるのなんて誇らしくないだろう？そんな証拠をなぜ！？そうだろう??」

俺は必死にママを説得しようとした。顔は最上級の悲しそうな顔だ。

「あーだこーだ言わない！こんなこと滅多に無いんだから。」

ママには通じないらしい。問答無用にフラッシュが炊かれた。酷い.....。

「いいじゃないゼノ。可愛いんだから。」

「そうよ。とっても可愛いわ。美人だわ。」

「俺は男だ。女じゃないんだ。この格好したら誰1人俺のことに気づかないんだ。誰も男だって思わない。だけど男なんだ。こんな格好して可愛いなんて言われて嬉しいわけないだろ。」

「だけど事実よ。これなら男の1人や2人コロツといけそうじゃない？」

リーダは面白そうにそう言った。

「冗談じゃない。朝からお前のせいで最悪だし、こんな格好するはめになるし、学校でバレないかってすげービビってたし、おまけにあの.....」

「おまけに、何よ。」

「とにかく、最悪だったんだよ。俺は男のゼノに戻るからな！！！」

俺はそう言うときッチンから逃げた。

おまけにあのアベルに女と間違えられて一目惚れされた上にキスされたなんて、アベルに夢中のリーダに言えるわけが無かった。これだけは俺をからかって笑ってるリーダだって笑えない。

だけど、これでまた明日から男のゼノしか存在しなくなって、今のこの謎の美少女はこの世から消え去るんだ。

俺が黙ってたら、何も無かったことにできる。リーダはアベルに夢中のまま、アベルは謎の少女を学校に通う女子生徒の誰かだと思ったまま、俺は女装して学校に行ってたってこともアベルのことも自分の胸だけに秘めて今までどおりのゼノの生活に戻る。

俺は服を脱ぎ捨てた。

今日は、なんて日だ。最悪って言って良かった。

洗濯物は下の階の乾燥機にまだ入ったままだっことを.....忘れてた。

-Step 5-

次の日は、清々しかった。目覚ましはちゃんと動いてて鳴って起こしてくれたし、俺のクローゼットには服が戻った。昨日のことはきつと夢だったんだ。そう思うほど何もかもが元通りだった。

「今日はどんなメイクがいい？ゼノ。特別に私のリップグロス貸してあげるけど。」

しかし、夢ではなくてすべて現実のことだったらしい。

「うる、さい。お前は女装をした俺のことなんか知らない。そして俺も、そんなもの記憶に無い。だろ？」

俺はシリアルに牛乳をかけながら、リーダにそう言った。

「ハイハイ。そういうことにしといてあげるわよ。あんまりからかうと泣いちゃいそうで可哀想だから。」

「ああ、ありがとう。俺、泣いちゃう。言ったらブツ飛ばす。」

「誰にも言わないわよ。なんのために女装手伝ったと思ってるのよ。」

「私も何も言わないわ。」

楽しそうに話に割り込んできたのはママだった。

「父さんだって言ったりはしない。」

にやりと、パパまでだ。しかも、パパの手元には昨日ママが撮った写真が置いてある。

俺は忘れ去りたいんだ。勘弁しろよ。

「ああ、もう！」

学校は平和だ。やたらと女装のこと思い出させるように、その話題をほじくり返してくる家族はいない。今日の学校は特に平和だ。

「よう。昨日どうしたんだよ。腹でも下したか？」

誰も特に俺の友達が昨日の俺のことなんか全く知らないと本当にありがたい。

「そうなんだよ。リーダのやつが俺のグラスに下剤入れてやがった。」

「マジかよ！？お前の姉貴ヒデェ！！」

「あれだろ、先週の落書きの仕返し。あれは酷かったもんな。」

ああ、確かに先週のはやりすぎだった『かも』しれない。でも、昨日の『本当に』やられた仕返しだって、やりすぎだ。

俺の人生で、女装することなんか無いと信じてたのに。下剤の方がよかった。

「昨日は本当に最悪だった。だけど、今日は、問題ナシ。」

バレなかったし、何事も無かったんだ。

「リーダの報復は終わった。先週のことはチャラだ。これで元通りに戻...」

バンッ！！

俺は勢いよくロッカーの扉を開けると、その中に頭を突っ込んだ。

「おい、どうしたんだよ。」

アベルがこっちに歩いて来るのが見えたからだ。

「いや、ちょっと忘れ物してないかなって急に思って.....。」

心臓がバクバクいっていた。こっち向きませんように、と何度も唱えながら。

そんな俺の心情とは裏腹に全く透明人間になったかのように、こっちに気づかないでアベルは通り過ぎて行った。

そうだ。よく考えたら俺が男だってこと知らないんだアイツは。どっかの謎の女子生徒だと思ってるんだって。俺がそうだってバレることなんかなかった。

気づいて、落ち着いた俺はふうと大きく息を吐いた。変な汗かいてしまった。

昨日ヤツに出会ってから、ヤツから逃げることはばかりに全力投球してたから、条件反射で体が動いたらしい。男に戻った今、アレが俺だってヤツが気づくわけもないし、俺が逃げ隠れする必要なんかない。

確認するようにチラッとアベルが歩いて行った方向を見ると、一瞬また心臓が跳ねた。どっか行ったわけじゃなかったらしい。数メートル先に立っていた。

アベルは可愛い女子生徒2人となにか話してるみたいだった。クソ、俺なんか話しかけるのすら苦勞するっていうのに。

「ゼノ。なんか変だぞ、お前。」

俺の行動が変に思ったらしい。俺の友達が俺を見ていた。

「どこも変なことなんかない。よくあるだろ、昨日の下剤事件で急にやつれた反動だ。」

自分でも何言ってるのかよくわからなかった。

またチラッと見たアベルに今度は心臓が止まりそうだった。アベルの手に持つてるモノをよー——く知ってたからだ。

あのネックレス.....！！！！

もう一回ロッカーに頭突っ込みたくなかった。

あれは昨日俺がしてたヤツだ！

なんでアイツが持ってたんだ！そう思ったけど、答えはすぐに出た。昨日逃げた時に落としたんだ。どうしよう！！

「アベルがどうかしたのか？」

俺がアベルを凝視してるからか、他のヤツらが俺の視線の先を追ってそう言った。

「ホントあいつモテるんだよなあ。羨ましい。同じ男なのに、何だよこの差。あの2人のどっちか紹介してほしいぜ。」

俺がどうしてアベルを見てるのか全くわからない友達は口々にそんなこと呟いてた。

確かに俺だって同じ男だっていうのにモテるかっていうと、アベルには勝てない。

そうだ。同じ男だ。アイツ俺を女だと思込込んでた。絶世の美少女だって。ちょっと不本意だけど。まさかそれが男だって思いこないんだ。

「否、アイツの持ってるネックレス、リーダが無くしたって言ってたやつなんだ。」

「なに、お前の姉貴アベルとヤツたの！？お前アベルと口さえまともに聞いたことないくせにこないだ茶化してなかったっけ。」

「ちがーう。それは、有り得ねえ。俺のリーダ日記定期購読率舐めんよ。」

俺のだ。なんて言えるはずない。もう1つ言うならリーダがアイツと口を聞けるはずもない。

だから、リーダのだっていうのは『有り得ない』だけど、俺のだっていう方がもっと『有り得ない』。

けど、有り得たのが、マジで『有り得ない』。

「ちょっと調査してくるわ。追って報告する。じゃな。」

俺はそう言って友達を散らすと、アベルの方に歩いて行った。絶対バレっこないと思ってても、近付くにつれて心臓がバクバクしていた。

きっと無駄にいい男すぎるせいだ。で、昨日……………否、待て思い出すな。

「ちょっと、ゴメン。」

咳払いをして注意を引いてから、俺はそう言った。可愛い子2人とアベルは俺の方を見た。一瞬ビクツとした。

「そのネックレス…………俺のなんだけど。返してくれる？」

手を出してそう言うと、3人が怪訝な顔をした。特に女の子が。なんで。

「聞くけど……あんた、男でしょ？」

「もちろん。身も心もどこまでも男だけど、なんで。」

「さっき、アベルがこのネックレス落としたのは、『女の子』だって言ったばかりなんだけど。どうしてそれが、あんたのものなわけ。」

なるほど。

「そう！女の子！！落としたのは女の子だけどそれは俺のなんだ。彼女は、俺の彼女で、俺のを貸してたんだ。で、アベルに会いたくないからって、俺のだし、取り返しにきたんだ。俺はアベルに会いたくない理由は聞かなかったけど、何かあったのだけは知ってる。それについて俺は喧嘩売りに来たわけじゃない。わかった？」

説明して手で催促するとアベルは何も言わないで俺にネックレスを返してくれた。

俺は友達にはリーダのだと言った。俺に彼女がいないのくらい知ってたし、女装のことがバレる種は撒きたくなかったし。

遠くて俺のしてたのだってわかりっこなかったし、ヤツらが一々覚えてるわけがなかったからだ。

だけど、アベルにリーダのだって言うとなんか面倒なことになりかねない。この様子だったら女装した俺のことまだ探してるみたいだし、リーダはアベルが好きだし、リーダのだって言ってアベルがリーダに接近したら困る。

俺の彼女だっていうことにすれば、彼女は存在しないし、彼女には俺っていう彼氏がいるし、アベルだって諦めるだろう。

「ありがとう。」

アベルは俺を見たけど俺が例の彼女だってことに全然気づいてないみたいだった。

俺はっていうと急に昨日の眼差しを思い出して心臓が嫌な音を立てたくらいだ。

今後もう関わりはないし、アベルと面と向かって話すのもこれが最後だ。

「いいよ。彼女に悪かったって伝えといて。」

「ああ、伝えとくよ。」

俺はそう言った。伝える相手は俺なんだけど。俺はそう思いながら目の前にいる金髪の美女2人を眺めた。彼女たちをこんな間近で見られるなんて。これでチャラだ、アベル。

「2人とも、もしも、俺に彼女がいなかったら声かけちゃうところだ。」

ニッと笑うと、ふとアベルと見比べられてハッと鼻で笑われた。ひでえ。

くそ、アベルと一緒にいなかったらこんなことにならないんだ、きつと。

「彼女の名前は？」

ふいにアベルが俺に聞いた。

「ズ、オ～イ。ゾーイっていうんだ。だからってもう近付くんじゃないぞ！」

ゼノって名乗りかけて、とっさにそう言う俺はその場から逃げた。昨日みたいに。危なかった。

-Step 6-

今日は何事も無く過ぎて行った。

本当にリーダの計画は上手くいって、誰も俺がリーダの服を着て学校に行ってたからって、今日笑い者になることもなかったし、そのことを誰1人（リーダ以外は）知らない。たぶん。リーダが友達に影で話してクスクス笑ったりしてない限りは、誰も知らないはずだ。

そして、今日は平和に家に帰ってゲームでもする。なんていい響きだろう。

そう思って機嫌良くロッカーの扉を開めた時だった。

バンッ。

「うわあっ！！！！」

死んだかと思った。一瞬動けなかった。

ロッカーの扉に代わって目の前に現れたのは、『アベル』だった。思わず俺はゾンビにでも遭遇したかのような悲鳴を上げてしまった。当たり前だそれ以上にビックリしたんだから。ゾンビの方がまだましだ。

でも、できるならこの叫び方をしたかった。

ああああああああああああああああああああああ！！！！！！

でも、昨日のときみたいに心の中で大絶叫してるだけだった。でも、昨日と違って声は出た。

「ア、アベル！！」

口から心臓が飛び出しそうだった。否、内蔵全部。

「何の用だよ！」

思わず声が裏返った。しょうがない。目がまだ驚いて倍の大きさなもの、しょうがない。

「ゾーイ。否、ゼノって言ったっけ？」

お前、何言ってんだ。

って声が出なかった。

「あ.....お前.....こ...あ」

頭はパニックで口をパクパクするだけで変な音しか出て来なかった。

「やっぱり、そうなんだ。」

ロッカーに寄りかかって、的を射たようにニッコリ笑ったアベルに、バレた！と思った。

「ゾーイは、ゼノだ。」

1-1は0だ！って言うような口調でアベルは俺に言った。その瞬間、なにかわからないけど、逃げないと行けないと思った。昨日みたいに。

俺は猛ダッシュで走り出した。

「待てよ！」

でも、昨日みたいにいかなかったのは、ヤツが追って来たことだった。しかも、マジで。

「追っかけてくんない！！」

「嫌だ！！」

「ナンだよ！！」

「お前が逃げるからだろ！！」

「なんでなんだよ〜〜！！」

バックバックに重いものなんか入るんじゃなかったとか、もう少し脚が長かったらとか、なにか早く走れるクラブでもしとくんだったとか、思ったところで遅かった。

アベルのヤツの脚の速さっていったら、尋常じゃなかった。それでスカウト来てんだから、当たり前だけど。

俺はほどなくして、タックル付きでアベルに捕まった。

「お前、脚速いな。」

息切れして芝生に転がるアベルがそう言った。

「死ぬ気のマジに走ったんだ！ふざけんな！」

もう、走れない。息切れどころじゃなくゼーハーいってる俺は芝生に伏せられてた。

「逃げるから悪いんだろ。」

「追っかけてくるのが悪いんだろ！」

「なんで。」

「なんでって...ああ、もう。重いからどけよ。」

「また逃げるかもしれないだろ。」

「もう、走れないって。逃げてても無駄だ。」

言うとかアベルは俺の上から身を退いた。俺は仰向けになって息を整えた。こんなに必死になって走ったのなんか、犬にちよっかいかけたら綱切れた時以来だ。

「で、俺になんの用なんだよ。」

大体は想像ついたけど、俺はそう言った。まだ息が荒い。

「一緒に帰ろうと思っただけだ。帰りにファーストフードでも寄って。」

「グッ、ゲホッゴホッ」

有り得ないセリフに思わずむせた。

「お前、ふざけてんのか！」

「俺はマジだ。」

何も言えなかった。その顔はマジだ。真面目にふざけてんじゃなくて、マジのマジだ。

「わ、わかった。俺もお前に話すことがあるんだ。」

-Step 7-

「で、そういうわけで女装するはめになったんだ。だから、女装の趣味があるとか、そんなんじゃないんだ。」

「へえ。」

「だから、お前が知らなくて男の俺にキスしたことも黙っというやるから、俺のことも黙っというくれ。」

俺たちは学校の近くにあるファーストフード店にいた。俺は、どうして女装するはめになったかのこの顛末をアベルに話して聞かせた。

やっぱり俺がやったことはデカかったみたいで、アベルも落書き女子生徒事件っていうのでリーダのことを知っていた。（おっと。）

あの日の日記は凄かった。アベルって単語も何個出て来たか覚えてない。リーダの最悪の妄想による予想は当たってたらしい。

ごめん、リーダ。

俺の言葉を聞いたアベルは柔らかく笑った。俺は眉間にしわが寄った。

言いふらすとか女々しいこと言い出すのか。そう思った。

「言うもんか。」

だけど、それは『バカにすんなよ』の笑顔だったらしい。

「お前に女装趣味が無くてよかった。もしかしてオカマなのかと思ったから」

「ふざけんな。マジでふざけんな。」

「わかってるって、落ち着けよ。」

アベルはおかしそうにそう言った。俺のことガキ扱いするような言い方に少しムツとした。確かに、リーダより1コ上で、俺からしたら3コも歳上なんだから、しょうがないけど。

ついうっかり普通にバナラシェークなんか頼んだけど、ちょっとガキっぽいし、コーラとかにしときゃよかった。いつも友達とだったら、シェークの飛ばし合いとかして騒いでるけど、何だかソレも凄い幼稚なことに急に感じて来た。

終始ニコニコしてるアベルに居心地が悪かった。あのアベルと向かい合わせて座って話してるなんて、変な気分だった。

リーダの好きな人で、学校のスターみたいなヤツなのに、俺と座って飲み物なんか飲んで、こんなところリーダに見られたら後でどうしてだとか殺さんばかりの顔でたっぶり絞られる。

「納得したよ。」

俺を見てニコニコしてたアベルは、楽しそうにそう言った。俺は何が楽しいのかよくわからない。

たしかに、女子がリーダも含めてキヤーキヤー言う理由がわからなくもない、この笑顔は、なんていうか、魅力的だ。どっかのCMに出演できそう。否、ドラマとかにも出れそう。つまり、俳優。みたいな。そんな笑顔を俺だけが受け止めてるんだから、居心地悪くても納得できる。

「なにがだよ。」

「どーりで、胸が無くて、骨張って筋肉質だったわけだ。って。それから走り方がずいぶん男っぽいって、ちょっと思ってたから。一言も話さなかったし。納得できた。」

おかしそうに言うアベルに俺は仏頂面するしかなかった。

「女装はただの事故みたいなもんなんだ。そんな急に女らしい行動なんかできるか。知ってるか、ヒールってすげー足痛いんだぜ。」

「別に知りたくない...。」

「俺も知りたくなかった。」

お前のせいで走るはめになって靴ずれ起こしたなんかも、言いたかったけど言わないでおくことにした。

「残念だったな。俺が男で夢ぶち壊しにして。」

「別に。じゃあ、本当は彼女がいるっていうのも、嘘なんだ。」

「それは.....あれだよ.....」

もしかしたら彼女が5人いそうな、アベルにいないっていうのは闘う前に敗北宣言するような、なんだか物凄く負けたような気がした。でも、実際のところ、今はいない。

「何。」

「いる～ような、いないような.....」

これが2ヶ月前だったら、いるって簡単に言えたものを。

「いないんだ。」

「ああ、いないよ、今は。」

俺は吐き捨てるように言った。

「どうせ、お前はいるんだろ？んなもん、知ってる。」

自慢話なんかいらぬ。俺だってそこそこモテるんだ。だけどアベルに勝てるやつっていうのは学校内であまりいない。

「俺の話はすんだ。俺は言わない、お前も言わない。それだけだ。」

俺はそう言うときシェークを持って立ち上がった。いつまでも話してるほど俺はアベルとは仲良く無かったし、どうもニコニコじつとこっちを見られてたら落ち着かないから早いことヤツの前から姿を消したかった。それに、昨日あったことは俺にとってはかなりの衝撃的なことで、昨日の今日で忘れられるものじゃなかった。

だからさっき逃げたんだ。結局無駄だったけど。

するとアベルも無言で立ち上がった。

「俺は行く、けどいたけりゃいていい。」

「でも、お前は帰るんだろ？」

「そうだけど。」

「じゃあ、一緒に出よう。置いてかれるのは嫌だ。」

「あ、うん。」

俺は返事をしてバニラシェークを飲んだ。また走って逃げたくなった。
もう話はすんだし、女装のことも知ってるんだから逃げる必要なんかなかったのに。

「なんで付いてくるんだよ！！」

店を出て、アベルに無言で手をひらひらして別れを告げた……はずだったのに、どういうわけか今一緒に歩いている。
アベルの家がどこにあるのか知らないけど、一緒にいるのは居心地が悪いから早々に店を出たっていうのに。
なぜだ。何一つ思い通りにいってない。

「送って行こうかと思って。」

「俺は、ゼノだ。わかんないのかよ。ゾーイは幻、マヤカシ、存在しないんだ！」

あのアベルがここまで頭悪いなんて知らなかった。リーダの日記には成績悪くないって書いてあったんだけど。嘘だ。アホだ。

「わかってるよ。」

「絶対にわかってない。」

「わかってるって。さっき理由だって説明してくれたんだ。ゾーイってとっさに名付けた女の子の正体はゼノで、男だ。別に、お前を女の子扱いするつもりはないんだけど、正直どう扱っていいのかわからないから、たぶんこうなってるんだ。」

なにかおかしいらしく、またアベルは楽しそうに笑ってみせた。半分困った、っていうような感じでもあったけど。

「お前男友達いないのかよ。」

「いるよ。たぶん、お前よりも。」

「嫌な言い方。確かに俺はまだガキって言われるかもしないけど、俺はまだ車すら乗れない歳だから1人で帰れないとでも思ってるのかよ。今何時だと思ってるんだ。日も暮れてないのにアホなこと言うな。それに、今から俺は本屋に行くところなんだ。家じゃない。」

するとアベルは笑った。

「お前、3年前の俺そっくりだ。なに、エロ本でも買いに行くの？」

「ちがーう。」

「マンガか。どっちでもいいけど、俺今日は暇なんだ。嫌でも付いてく。」

楽しそうに笑ったアベルはそう言うと俺の頭をなでた。俺はその手に少しビックリした。

「ジコチューって言葉、知らない？メークってのは？」

その言葉にアベルは笑うしかなかった。やっぱり思い通りにまったくいかない。

姉しかいないからわからないけど、もし俺に兄がいたら、こんなかんじかもしれないとふと思った。

-Step 8-

「ここがゼノの家か。」

結局。結局、というかやっぱり、こうなった。俺の家の前に、俺はアベルと立ってる。

どういうわけか、今日は家に帰って平和にゲームのはずが、アベルと日が暮れるまで遊んでしまった。

「そうだよ。わかったら、とっとと失せろ。」

「なんだよその言い方。」

「リーダに見つかったらメンドクサイからだよ。」

「どうして。」

俺がアベルを連れて来たくなかった理由はリーダだ。俺とアベルと一緒にいるところを見られるのは、都合がかなりよろしくない。

「リーダはお前に夢中なんだよ。家の前にアベルがいるって知ったらもう、危ないくらい騒ぐ。」

今でも背後を気にしてるっていうのに。もしうっかりリーダが窓の外を見てみる。核爆発でも起こったくらいに大騒ぎするのなんか簡単に想像できる。

で、なんで知り合いなんだって脅迫して吐かされる。

アベルが早くこの場から去ってくれるほどありがたいもんはないのだ。

「お前が俺を避ける理由って、お前の姉のせい？」

「他に何があ.....」

アベルはそう尋ねるとチラッと上の階を見上げた。まさか覗いてるんじゃないだろうな。思った俺もとっさに振り返って見上げた。

だけど、電気はついててもカーテンがしまっていた。

「びっくりさせんなよ。わかったら、さっさと帰れよ。」

「わかったよ。」

俺は素直に従うアベルの言葉に安堵のため息をついた。昨日からの嵐はもうすぐ終わる。

「うん!？」

そして気を抜いた瞬間だった。強く引く力を感じたと思ったら、俺はアベルにキスされていた。

昨日みたいな挨拶のような1秒キスみたいなのではなく、しっかり唇を合わせるようなやつだ。

とっさに押し返そうと腕に力を入れたけど、びくともしなかった。俺を抱締めるアベルの腕の力の方が強かったからだ。

パニックのせいか、心臓が止まりそうなほど速度を上げて、味見でもしてるかのように器用に動くアベルの唇に背筋がゾクリとして、思わず目を閉じてしまった。

こんなの、初めてだった。当たり前だ、女の子はこんな腕力持ってない。

「ん.....」

知らずに鼻に抜けるような声を出してた。こんなキスの上手い相手とキスしたこともされたこともなかった。

アベル.....

俺は心の中で眩いた。その時そっと彼の唇が離れていった。残された唇が少しだけ疼いて、知らずアベルの肩を掴む手に力が入った。

「なに、...すんだよ。」

俺は目の前のアベルを見た。不思議と起こる気も驚いて怒鳴る気にもパニックにもならなかった。

「こんなとこ、リーダに見られたらどうしてくれるんだよ。」

少しもがいてみたけど、一向にアベルの腕は俺を捕まえたままゆるまなかった。

じっと真っ直ぐに見てくるアベルの視線に、気づかず少し赤くなった。

「いつも姉のことばかりだ。」

「当たり前だろ。今までの話聞こえてなかったのかよ。リーダはお前に夢中なんだ。俺がお前といるところを発見されたら何も説明なんかできない。」

「だけど、俺はお前に夢中なんだ。」

「...。」

声が出なかった。なんて言っただけいいのかもわからなかった。俺はただアベルの目を見つめ返すしかできなかった。

どうしよう、胸がぎゅっと掴まれたかのように苦しくなってきた。

「悪いけど、お前の姉に会ったことも落書きのことも言づてに聞いたから見たことも無いし、知らないし、興味無いし、関係ない。正直ゾーイにも興味無い。俺のことは友達ってことにすればいい。そうだろう？間違いないじゃない。」

アベルはそう言うのと軽く俺にキスしてから、俺を解放した。

「じゃあ、また明日。」

「う、うん。」

俺は無意識に返事をして、去って行くアベルを見ていた。その時ハッとした。

「おい、待てよコラ!!!」

俺は十数メートル離れたアベルに向かって叫んだ。その声にあベルは振り返る。嬉しそうに。

アベルがそうするのが俺も嬉しいのがわかってしまった。

「俺のことは無視かよ!!!」

一方的で自己中で、俺の気持ちは何も聞かないし、無視かよ。

俺がどう思ってるのなんかさっきまでわからなかったし知らなかったけど、今さっきわかってしまった。それがどうしてか許せなかったんだ。悔しかったし

。どこかムカつく。

「うるさい！！玄関の前でナニ叫んでんのよ！！！」

バン！と二階の窓が勢いよく開いて、リーダの声が飛んで来た。俺の心臓は豆粒くらいまで縮まるのがわかった。

「明日聞かよ！」

アベルはそんなこと気づいてるのかどうなのか、何も動じないでニツコリ俺にそう言って手を振った。

それに絶句してるのは俺と、そしてリーダだった。

今家に入りたくない。アベルを追いかけて泊めてくれ否、リーダを止めてくれて言いたかった。

アベルは小さくなって行く。

ガチャッ！

急に玄関のドアが開いた。そしてヌツと手が伸びて来て、俺の服を掴むとさっきのアベルの比じゃないくらい凄い力で引っ張られた。ここにいた、腕力がすごい女が。

「さっきのって。さっきのって。アベル！？」

俺の肩を掴んだリーダは次の瞬間ガクガク振り回さん勢いで俺に聞いてきた。まさに、俺が想像してた通りの展開だ。

思い通りに何一ついかないアベルとは正反対だ。

「そうだよ。アベルだよ。」

「どうしてアベルがウチに来たの！？なんで！？何の用！？あんたアベルとどういう関係なの！？」

どういう関係.....。

急にさっきの濃厚なキスがフラッシュバックしてきた。感触を思い出すくらいに。ぎゅうっと心臓が縛り上げられて悲鳴を上げる。

「やめろよ！リーダには関係ないだろ！」

俺は必死にリーダの手から逃れた。そして、また捕まらない内に階段まで非難した。

「あんたアベルに何かしたの！？」

「ちがーう！」

俺がなにかされたんだ！

「アベルに聞けよ！！あいつのが俺よりよく知ってたんだ。俺は何も言わないからな。」

アベルは友達だと言えと言った。だけど、そんな余裕すら俺にはなかった。困らせたのはアベルだ。全部あいつに押し付けよう。

俺は吐き捨てるようにそう言うと、急いで階段を上りきって自分の部屋に戻ってベッドにダイブした。

心臓が全力疾走したかのように悲鳴を上げていた。それだけじゃない。どこか痺れるような。

ちょっとした悪戯の、ちょっとした仕返しだったはずなのに。ちょっとどころじゃなかった。姉が恋のライバルになるなんて。しかも俺譲る気すらない。勘弁しろよ。

何もかもアベルが悪いんだ。リーダが好きになるくらいカッコ良くて、俺が落ちちゃうくらい魅力的で、他にいくらでも女子がいるっていうのによりによって俺なんかには惚れるから。

全部アベルのせいだ。

今日から俺の大変な生活が始まるんだ。

明日アベルに会ったら何言ってやろう。

でも、何一つ思い通りにはいかないんだ。今から考えてもしょうがない。

End...?

Zeno's Soliloquies

今朝は最悪だった。

最初の最初はよかった。

今までのことをすっかり忘れていい気分で眠ってた。それはもう、今からしたら香気もいいところなくらいに。

数日前のようにリーダに目覚ましを止められてることもなく、朝方まで眠れなかったのもあって、ぐっすりだった。

つまり、無理矢理にでもママに起こされた俺は酷く寝不足だった。

寝ぼけてた俺は、何もかも忘れていて、いつも通りの朝を迎えてた。

リーダが睨んで来るまでは。

リーダがなにか言い出すまでは。

平和だったんだ、ものすごく。

リーダがそんなことしなくても、学校に行けば現実を思い出したのは確かだろうけど、俺はまだ夢の中で平和にしていたかったんだ。

なのに、リーダは俺を見るなり、俺の寝癖に何癖つけるより先に凄い勢いで睨んできた。

今日の寝癖はいつも以上に酷かったんだから、リーダが食いついてこないっていうのは有り得ないはずだった。

『なにかしたっけ、俺……………』

俺は最近こまでリーダを怒らせるようなくらしい悪戯をしたか寝ぼけた頭で考えてみた。

寝癖に文句言わないのが怖かってほど、リーダは変だった。

「何だよ。朝食食べる前に髪の毛セットしないとイケないっていう決まりなんかないだろ。」

鏡を見なくても今日の頭の爆発ぶりをわかってた俺は言えば、リーダはずっと俺を睨んだままだった。

「あんたの髪の毛がどんなに重力に逆らっても、そんなものどーでもいいわ。」

「ど…………どーでも…………」

どーでもいいって言ったか？言った。

見つけたとたんにかからかう、あのリーダが、どーでもいい。

俺は面食らって一瞬何のためにキッチンまで来たのかすら忘れた。

「ゼノ。突っ立ってないで、早く食べなさい。卵は？」

リーダの発言に唾然としてる俺にママがそう言ってハッと我に返った。

そうだ、朝食を食べにきたんだっていうことを。

シリアルボールにシリアルを入れて、牛乳を入れて、それからいつものようにオレンジジュースをコップに注いで、それを飲む。

チョー寝不足の俺は気がついたらポーっとしてしまう。

リーダの視線も、どうして睨んでるのかも、なんで俺の頭に文句言わないのかも、気にならなくなった。それどころか、周りの話し声も少しどこか上の空だった。

リーダとママが話してる。

寝不足の寝起きなんだから当然ってやつだ。

オレンジジュースが美味いとか、思ってたかった。

「——ゼノ！マジであんたアベルとどういう関係なの！？」

フッと俺に向けたリーダの声が耳に入った。

ブーーーーッ！！

瞬間、俺は向かいにいるリーダ目がけてオレンジジュースを吹いていた。

わざとじゃない。

事故だ。

「キョア〜〜〜ッ！！！！何すんのおゼノ！！！！チョッ、マジ信じらんない！！！！やだ、マジ、キモい！！！！」

とたん耳にしたのは、眠気も一気に覚めそうな、鼓膜さえ破壊しかねんリーダの絶叫だった。

理由はわかるし、気持ちもわからなくもない。

だけど、

「お前が変なこと言うから悪いんだろ！！？」

口元を拭いながら俺はリーダに言い返した。

リーダはまるで猛毒でも吹きかけられたかのように必死にティッシュにワタワタと手を伸ばしていた。

アベル。

その名前も存在も全く忘れてたっていうのに。

その一言だけで何もかも思い出した。

聞きたくなかった。

「何がよ！！アタシなにも言ってないし！！！！マジ、最悪！！！」

バシヤッ

「なっ！」

コップを掴んだリーダは俺の顔目がけて牛乳をぶっかけてきた。
オレンジジュースのがまだマシだろ。

「2人ともいい加減にしろ！！」

俺が何かリーダに言い返す前にママが怒鳴った。
俺もリーダも、あとパパも、敵わないのはママだけだ。
俺はあごから牛乳を滴らせながら黙ってた。

「まったく……」

うんざりするようにママは言うど、俺もリーダもそれに反論はできなかった。
リーダが悪い。
きっかけはリーダだ。
オレンジジュース吹きかけたのは悪いとは思うけど、あれは事故だ。
なのに、なんで俺は牛乳を顔で受け止めなきゃならないってんだ……
おまけに、忘れてたことを全部思い出した……
勘弁しろよ…。

アベル。

それは今日俺が一番会いたくない人物だ。

今日の朝はこうして終わった。

学校。

俺がどんなに願おうとも、俺の望む真逆をまれなくやっつけてのけるのが、俺の最大の苦手な『アベル』っていう男だ。何一つ俺の思い通りにヤツが動いてくれたことは、俺の知ってる限り無い。そこまで付き合いが長いわけじゃなく、ここ数日しかヤツのことは知らないけど。

アベル。

リーダより2つ歳上で、俺よりも3つ歳上の、いわゆる上級生。その態度たるやオーハーでいて、自己中心的。しかし、女子（というかリーダのリサーチ。俺はリーダの日記により情報を得る。え？）もちろん無断で日記読んでるに決まってるだろ。リーダへの嫌がらせかって？半分な。）の見解だと、どうやら違うらしい。優しく、頭が良くて、リーダーシップがあり、人の話をちゃんと聞く男らしい。しかし、俺の知ってるアベルっていう男はそんなことは『全然』無い。まるで別人の双子みたいだった。

優しいか、どうか。優しいなんか思ったことは一瞬でもない。頭が良いか、どうか。ヤツが成績良いのは有名だから頭は悪くないはずだろう。が、まったく言ってることが意味不明な時や頭おかしいんじゃないかと思ったことは何度もあったから、俺には納得できない。リーダーシップについては、俺は何も知らん。

人の話をちゃんと聞く男か、どうか。全く俺の話は『全く』の『全く』聞いてくれない。というか『全く』通じてない。まるで俺の声が一切聞こえてないかのようだった。ヤツが人の話を聞く男だと一瞬でも思わないし、何がどうなったらそんな印象が生まれるのか俺には全くわからん。リーダのアベル像っていうのが疑わしいことこの上ない。もしかしたら、女子と男子とじゃ態度が違うって言う二重人格ヤローなのかもしれないけど。案外リーダにヤツを会わせたら、イメージと違うから熱が冷めるかもしれない。しかし、俺にはそんな賭けのようなことはできないし、したくない。というか、そもそも俺はヤツにキョーミの欠片さえないし、毎朝顔に牛乳浴びるハメになるんだったらもう関わりたくない。そのくらいに、俺はアベルのヤツなんか好きじゃないし、会いたくもなかった。

会いたくなかったんだ。本当に。アベルに会うんじゃないかと思うと胸をぎゅっと掴まれたような気分になったとしても、それは怯えてたからだ。その証拠に学校についたとたん周りをキョロキョロとよ〜く観察しながら歩いて自分のロッカーまで来た。そこには誰もいなかった。いつもいる友達さえも、来てなかった。少しホッとしながら、ロッカーの扉を開けるとヒラッと紙切れが降って来た。「んあ？」俺はそれを空中でキャッチすると、眺めた。そこには俺の文字じゃない文字があって、俺の友達が書いたよーには到底思わない文字が並んでた。

『昨日はとても楽しかった。また、すぐに。 A』

俺は紙切れを持って、しばらくその文字を眺めていた。寝不足も手伝って頭がよく動いてくれなかった。否、何も考えない努力をした。これは、俺の友達を書いたもんじゃないってことくらいわかってたし、俺のメモの紙切れじゃないのも確かで、そして、女子からじゃないような気もしないけど、そうじゃない気がする。だって...『昨日』っていったら『昨日』でしかなくて、『昨日』とイニシャル『A』に該当するヤツなんか1人しかいない。

『すぐに』

この『すぐ』っていうのが、どれだけすぐなのかわからない。
が、あんまり考えたらいけない気がする、そうじゃないと今すぐ発狂しそうだから。
俺にはこの紙切れは脅迫状にしか見えなし、それ以外の目的ってあるもんか。

俺はグシャッとその紙切れを握りつぶすと見なかったことにした。

俺は何も見えてないし、何も読んでないし、イニシャルAっていうヤツのことも知らなければ、
『昨日』『A』とキスしたことなんか知らない。

ああ、クソ、思い出した。

『俺はお前に夢中なんだ』

じっと俺の目を見つめながらアベルは言った。

どんなに忘れようとしても、払っても払っても無駄なゴミにたかるハエのように、昨日あの時からどうしても頭から消えてくれないし、あの時俺がどんな気持ちだったかも、思い出すたびに蘇って来るんだから、忘れられなんかしないし、知らないフリしかできない。

たとえ、俺があの時あ言われてすごく嬉しかったとしても、この紙切れを見てちょっと心臓が跳ねたとしても、俺は昨日のことなんか知らないし、こんな紙切れも見ただ覚えもない。

アベルって一体誰だろう？俺会ったこともないぜ。
ってやつだ。

俺はホモになる気なんかないし、男のこと好きじゃないし、女が好きだし。

アベルのヤツが女だったら何の問題も無かったのに、よりによってアベルなわけで、こうなったら問題がいっぱいすぎる。

もしも俺がアベルとデキたりなんかして、俺の友達が友達じゃなくなるかもしれないし、何よりバレたらリーダーにカウボーイもビックリなくらい早業で首にロープ巻かれてヤツの窓から吊るされる可能性なんか99パーセントの確率であるし、もしかしたらキッチンナイフをそれはもう正確に全部投げて来るかもしれないし、そんな俺の命に関わるリスクなんか負えるはずないし、そんな楽しくない人生なら俺はアベルと関わらない。

そもそもあんなヤツ好きじゃない。

好きじゃないんだ。

全部事故のようなもので、俺が望んだわけじゃないし、会いたいとも今は思ってもないんだ。

だから、これから俺はヤツのことなんか知らないふりをするのだ。

今まで通りの道を進むために、アベルの現れた後の道には進まない。

俺による俺のための道に行くのだ。

深呼吸しろ、ゼノ。

お前の握りつぶしてる紙はただの白紙の紙で、お前はそれをゴミ箱に捨て、友達がいる所に行っいつものように騒いで、授業受けて、その間寝て、ランチ食って、授業中寝て、で、帰るんだ。

肺一杯に空気を吸い込んで吐きながらロッカーのドアを閉めた。

バン。

そして、俺は次に空気を吸い込めなかった。

「おはよう、ゼノ。」

目の前にいたのは、俺の知らないハズのアベルだった。

俺は何も言えなかったし、呼吸すらできなかった。

学校

『すぐに』

辞書によると、
今から短い時間、早く。
そんなとこだった。

なんて曖昧な言葉なんだ、クソ。

『すぐに』っていう言葉ほど無責任な言葉ってもんは無い。

こんなんなら、『すぐに』っていう言葉なんか作るんじゃねーよ。1分後とか5分後とか書けばいいんだ。
俺の『すぐ』とヤツ、アベルの『すぐ』は一致してなかった。
通じてなかったってやつだ。

おかげで、俺は会いたくもないアベルと会ってしまったし、昼休み逃げないといけなくなった。

なんてことだ。

最悪すぎる。

もう、朝からずっと気分は最悪だ。

どれもこれも『すぐに』って言葉のせいで。

否、違う。

アベルのせいで！

学校

「久しぶりだね。」

アベルはロッカーに肩肘をついて、目が点になってる俺なんか見えてないかのように、穏やかにそう言った。その顔はどこか嬉しそうに見えた。

チョー寝不足で死んだ目をしながらも、死体を発見したような驚いた顔をしてる俺とは正反対だった。

アベルは俺の目を、吸い込まれそうだと思うくらいに見つめて来た。

俺はあんまりにも驚いていて、もう一回言う『驚いていて』心臓が、壊れそうだった。だから、俺は自分でもわかるような裏返しそうな声をしていた。

「昨日会ったばっかだろ。頭大丈夫か。おっかしーんじゃねーの。」

しまった、昨日のことは『知らない』んだった。

思ったけど、遅かった。

俺の言葉にヤツはおかしそうに笑った。

ちょっとバカにするようにも見えた。

俺より頭がイイからって、チクショー。

「たぶん、おかしいんだよ。昨日別れてから24時間も経ってないっていうのに、すごく久しぶりな気がしてならないんだ。もうずっと会ってなかったような気がして。」

だから俺はコイツに会いたくなかったんだ。

変なこと言うし、一緒にいて、落ち着かない。

どこかでリーダに見られてるんじゃないかって思うとさらに、落ち着かない。

俺は今すぐその場から去りたくなった。

今までにもしたように、逃げ出したく。

結局、成功したことなんかなかったけど。

アベルに見つめられるのは苦手だ。

「そんなこと知るかよ。目の前に時計吊るして歩けばいいだろ。」

アベルのこの笑顔を見るのも苦手だ。

それが俺に向けられてるのだと、もっと。

「そうだな。お前に言ってもしょうがないんだとは思うけど、早く夜が明けないかって、2秒ごとに時計を見てたんだ。とても長かった。どうしてだか、たぶんお前にはわかってると思うけど。」

「そ、そんなことわかるわけないだろ。俺がマインドリーディングできるスーパーヒーローとかでも思ってるのかよアホじゃねーの。」

アベルの姿を見るたびに、笑いかけて、話しかけられて、声が耳に届くたびに、俺はヤツを忘れるのが難しくなっていく。頭の部分をヤツがどんどん浸食していく。

俺の目はアベルの目に吸い込まれて行く。

お前なんか嫌いだ。

お前なんか嫌いだ。

会いたくないんだ。

アベルなんか。

俺は心の中で叫んだ。

学校。

「一体何の用だよ。」

「ゼノ、ただお前に会いたかっただけ。」

アベルはさらっとそんなことを言った。

「俺は会いたくなんかなかった。」

「どうして。」

アベルは少しショックを受けたような顔をした。

そんなこと知るか。

「ど、どうしてって、おま...だって.....」

どうしてって.....。

理由がすぐに出て来なかった。

たぶんいっぱいありすぎたからだ。

「友達と会いたくないっていうのは、一体どういうワケだよ。」

「友達って、俺はお前と友達になった覚えなんかねーし！」

「昨日言っただろ？俺たちは友達だって。そうしたら、お前は『うん』って頷いたじゃないか。」

「昨日のことなんか、俺は何も知らないからな！だから覚えてなんかないし！」

「さっき俺に昨日会ったばかりだって言ったばっかだろ。しらばっくられると、俺はとても悲しい。無かったことにされるのは、昨日少女ゾーイが実はゼノだったってわかったことも、お前と放課後遊びに行ったことも、お前の家の前でお前とキスし——」

「わああああああああああああ。」

俺は思わず大声を上げていた。

廊下中に響き渡って誰もが俺を振り返ったけど、そんなことは気にならなかった。

「.....るさいな.....。」

ヤツは耳を抑えながら俺を見た。

そんなこと知るか。

何言おうとした今。

学校で。

誰が聞いてるかって場所で。

「誰のせいだと思ってんだ、誰の！」

「覚えてないとか、知らないって言うお前のせいだろ？」

「んなわけあるか！」

そう言い返した時だった。

「よお、どうしたんだ、ゼノ。何叫んでたんだ？」

背後で声がした。

心臓が縮まるのがわかった。

この声は知ってる。

俺の友達だ。

本当の『友達』。

でも、タイミングが悪すぎた。

アベルと話してる時に来るなんて。

俺は昨日のことどころか、ヤツのことなんか知らないことにするはずだったのに。

「べ、別に。大したことじゃねーんだ。」

俺は友達の方を振り返った。

そこにはいつものように3人の目が俺を.....通り越した場所を見ていた。

「あ、アベル？」

全く接点の無いはずの学校1有名な上級生のアベルを見て、3人の声が裏返ってアベルを呼んだ。

アベルなんか大嫌いだ。

「それじゃあ、昼休みに一緒に食べるの楽しみにしてるよ。」

「えっ?...ハ!？」

突然明るく脈略も無く意味不明なことを言うアベルに俺は振り返った。

「その話楽しみにしてるな。じゃ。」

「ちょっ、ナニ、ハ?アベル！」

ナニ言ってんだ!!昼休みの約束なんかしてねーし!!

そう言いたかった。

だけど、口から何も出て来なかった。

そうこうしてる内にニッコリと嬉しそうに笑うアベルは廊下を歩いて行ってしまった。

どこかで見たことのある光景にそっくりな。

「ナニ、お前アベルと友達なわけ？」

「今日アイツとランチ食べるのかよ？」

「ってか、リーダのネックレス取り返しただけじゃなかったっけ？ どうしてランチするの？」

アベルが見えなくなると背後から、一気にそんな声が聞こえて来た。

アレだ、昨日の別れ際と同じパターンだ。

昨日はリーダのやつに質問攻めにされかけた。

今度はこいつらに...

こいつらには、俺が落としてアベルが拾って持ってたネックレスをリーダのだって嘘をついたんだ。

俺が仕方なく変装というか女装して学校に来てた事実なんか存在しないことにするために。

だから、俺が女装した時にアベルに出会ったことも何も存在しないことになってる。

そして、アベルはリーダと知り合いなんだって、思ってる。

「ちがーう。今日だけだ。今日だけ。友達なんかじゃねーよ。知り合いなだけだ。リーダのことで、少し、用があるだけだ。」

「へ〜。よくわかんねーけど、お前あのアベルと知り合いになっただけでもスゲーじゃん。」

「そ、そうだろ？」

「俺たちがヨロシクって言っとけよ。」

「おうよ。」

なんでいつの間にかアベルとランチすることになってんだろー俺は。

こいつらが現れる前まで全くそんな話なんかしてなかったのに。

だから、アベルに会いたくなかったし話したくも、見たくもなかったんだ。

結局逃げて全部俺に押し付けてんじゃねーか。

だからアベルなんか大嫌いなんだ。

学校。

いつの間にか、俺はアベルとランチすることになっていた。

そのことは俺の友達だって知ってる事実だ。

でも、事実じゃない。

俺はそんな約束した覚えなんか全くないし、なんで俺がアベルとランチしないといけないんだ。

確かに、アベルの座ってる席にはチアリーダーたちから色々普段じゃ絶対に近づけないような人間が沢山いる。それに、俺はかねてから、あそこに座ってみたいとも思ってた。

でも、それはアベルと会うまでの話だ。

アベルと何だかややこしいことになるまで、の話だ。

それまで俺はアベルっていう存在は知ってたが、一度だってお近づきになりたいと思った事なかったし、話すことなんかこの先も無いだろうって思ってたくらいだったんだ。

だけど、どうだ。数日前の女装事件のせいで、俺は追いかけられてる。

今、俺は使ってなかった空き教室の中で、どうしたものか考えてる最中だ。

チャイムが鳴って、昼休みになってから今までずっとここにいる。

腹は減ったが、ロッカーに行こうがカフェテリアに行こうが、アベルに捕まる気がする。

アベルっていうヤツはそう簡単に諦めそうなのに、ここ数日の経験からして諦めそうにない。

どーせ近々捕まるような気がしてならない。

しかも、拒絶しようがヤツは聞く耳なんか持ってないというか、俺の言うことなんか『聞こえてない』。

言葉が通じないなら何いってもしよーがない。

でも、体力も腕力も体格も.....頭脳も.....ヤツの方が勝ってる。

歳上だし。

歳上のわりには何言っても理解してないところが、俺より頭悪いと思うけど。

とにかく。

俺の勤が、そうここに長く居られないような気がさつきからしてならない。

この空き教室に俺が居るっていうことなんか、わかりっこないだろうけど、とにかく。

何も無いのに少し鼓動が早い。

落ち着こうと思って俺は息を吐きだ――

ガンッ

「ダァッ！！」

突然勢いよく開いたドアが俺の顔面目がけてぶつかって来た。

俺はちょうどドアの開く側にいたから。

「えっ？ゴメン！！まさか誰かドアの側にいるなんて思ってたから！！」

ドアと顔面衝突させたヤローは音と俺の声にビックリしてそう叫んだ。

痛いってもんじゃねえ。

痛いのか何なのかよくわからないし、涙が出て来た。

ふざけんな。

死ぬ！

「ナニがゴメンだコルア～！！鼻折れてたら、どーしてくれんだよ！！マジチョーふざけんな！」

この痛さはちょっと尋常じゃない。

気絶しないで、叫べてるのが不思議だ。

どこのドイツだ俺の大事な鼻を！

俺の国宝級の顔を！

「ゴメツ.....あつ」

謝罪の言葉は途中で変わった。

なにか見つけたような声に。

「げっ...」

ドアから出た顔は、見覚えのある顔だった。

見覚えありすぎるというか、一番見たくなかった顔だ。

「アベル！！」

「ゼノ！やっと思つた！」

ヤツは嬉しそうに俺を見た。

見つけた、だって？

俺はアベルを見た。

ちょっと乱れたような髪と、呼吸。

もしかしなくても探しまわってたってのか。

俺を。

この俺を。

「見つけたじゃねーよ！！マジでどんくらい鼻痛いと思ってんだ！！折れてる！ゼツテー折れてる！！」

アベルと関わるとロクなことがない。

それは断言して良い。

なんでこう毎日のように災難に遭わなきゃならないってんだ。

俺が一体何を...

否、リーダへの悪戯以外に...あ、あと女子更衣室覗いたっていうの以外に.....ああ、あとクラスメイトの服隠したっていうの以外に.....

あ、あと.....とにかく.....したってんだよ！！

アベルを睨みつけると、ヤツはひるんだ。

そうだ。

俺は怒ってるんだ。

メークだと思ってるんだ。

チョー鼻が痛いんだ。

もう、チョー最悪に。

全て誰のせいだと思ってるんだ。

俺が腹減ってるのも、鼻痛いのも、リーダに殺されるような秘密抱えてるのも。

それでも、やっぱり俺はアベルを見ると胸がいつぱ.....否、なんでもない。

アベルのせいだ！

「ゼ、ゼノ。」

「なんだよ！」

「本当に、ゴメン。」

「当たり前だろ！！誰のせいだと思ってんだよ、ドレもコレもアレもソレも！！」

「ああ。悪かったよ。ゼノ、落ち着けよ。」

ナニが落ち付けだ。

どんなに痛いと思ってんだ。

鼻だけじゃなくて！

「なにがだ。謝れ！1000回謝れ！！今すぐ！」

「興奮すると、もっと酷くなるぞ、その鼻血。」

「へ？」

鼻血？

俺は鼻から手を放した。

手が真っ赤だった。

それどころか、床にも服にも.....

イチゴジャム.....違う。

やべえ.....

「保健室に行こう。」

アベルはそう言うのと俺に近付いてきて、そっと背中に手を回すと開いたままのドアに誘導した。

俺はそれに素直に従った。

今はドーのこの言ってる場合じゃなく、アベルの言う通り保健室に直行すべきだ。

アベルは俺の鋭い燃えるような睨みにひるんだんじゃなく、俺のスゲー鼻血にビビっただけだったみたいだ....

抑えても止めどなく鼻が水道にでもなったかのように、血が止まらない。

もう、どのくらい流れただろう。

缶ジュース2、3本は軽い気がする。

このまま止まらなかつたら俺は鼻血で死ぬ。

なんてダサすぎるんだ。

ゼツテーに嫌だ。

嫌すぎる。

「本当の、本当にごめん。わごとじゃないんだ。俺がお前に怪我させるなんて...」

触れ合うほど俺のすぐ隣を歩くアベルは、俺の背中に手を置いたまま、

本当にこれ以上無いっていうほど申し訳ないっていう表情で俺を見つめていた。

心配で、しょうがないって.....よくわかる表情で。

「.....わかったよ....。もう、謝らなくていいよ....。」

学校。

結局、俺はアベルから逃げられた試しが、アベルと出会ってから数日経つけど...無い。どーしてだ。

今も俺の隣に座ってる。

あのアベルが。

学校一有名人の、女子には高嶺の花、男子からは羨ましがられる的の、アベルが。

俺はコイツに憧れなんか羨ましさも今は持ちやいないけど。

これっぽっちも。

「それで大人しくしといてちょーだい。アタシは昼ご飯食べたいのよ。」

保健室に行くと俺の様子に

「まあ！！一体どうしたの！！」

ってビックリしてた保険医のオバさんも、鼻血がやっとのことで治まれば、こんなセリフだった。

昼飯食いたいだって？

そんな俺だって腹減ってんだっつーの！！

俺は叫びたかった。

腹減ると食べ物なことばっか頭によぎる。

ハンバーガー、ポテト、サンドウィッチ、パスタ...

この際ジャンクフードでもいい。

腹減ってんだ。

叫びたかった。

だけど、叫ぶとまた鼻血が滝のように吹き出しそうで、俺はオバさんのデカイケツを見送るしか無かった。

ゼッテ俺の方が栄養必要だっのに.....なんだってんだクソ。

下向ただけでもダメな気がする。

俺は天井を見上げてた。

「大丈夫そう？」

「んー...たぶん。」

心配そうなアベルの声が耳に入った。

散々さっき騒いだから一体誰のせいだと思ってんだって言おうとも思わなかった。

「本当悪かった。」

「うるせー。謝んな。喋んな。俺をコーフンさせんな。もし、また鼻血吹いたらタックルしてお前の服血で染めてやるからな。人殺して来たって思われるくらいに。」

横目で睨んでやるとアベルは肩をすくめた。

「わかったよ。自分でもショックなんだ。まさか、他にもなくお前に怪我させるなんて...。折れてなくてよかった。」

「俺もそう思う。」

あんだけスゲー痛くて、スゲー鼻血ブーだったっのに、鼻は折れてなかった。

歪んでも無かった。

もしかしたらヒビくらいはいってるかもしれないけど。

気になるなら病院でレントゲン撮ってもらえ、ってよ〜俺の鼻血の止まった鼻を見たオバさんは言っただけだった。

それに安心のため息をついたのは俺と、それからアベルだった。

「こんなはずじゃなかったのにさ。今頃一緒にカフェテリアでランチしてるはずだったのに。」

アベルはため息をつくど、俺を哀れむような心配するような視線を向けて来た。

「あーソレ！お前、俺そんなこと知らねーぞ。何で、いつの間にか一緒にランチすることになってんだ、コラ。」

「...コーフンしない。」

「.....」

誰のせいで.....俺は目で睨んだけど、アベルはそれに笑いやがった。

面白そうに。嬉しそうに。

.....クソ。

保健室。

「約束してなかったっけ？」

「してねーよ。ってか、そんな話すらしてなかったし。」

「お前の友達も巻き込んだら上手くいくと思ったんだけどな。そうでもなかった。

お前を見つけたところまではよかったんだけど」

まさか探し当てたとたんに、大量出血させるなんて思ってもなかっただろう。

俺だって、突然ドアと顔面衝突するなんて、ドアとぶつかる1秒前までわかりっこなかった。

わかってたらあんな場所に立ってなんかいなかった。

どんだけ痛かったか

.....ま、俺にしかわからないんだろー。

「そんなに俺と昼飯食いたいってのかよ。」

「そうだよ。否、別に昼飯と一緒に食いたいっていうわけじゃないけど。」

「どっちだよ。」

「俺の望みは、できるだけお前と一緒にいるっていうことさ。」

ニッコリ笑ったアベルに思わず魅入ってしまった。

じゃっかん、顔に血が上って来た気がした。

こんなセリフ吐きやがった今、俺が鼻血吹いたら洒落んなんねーって。

「だから、今の状況は、俺にとっては悪くない。」

楽しそうにそんなこと言うアベルに俺は困った。

こんなこと言ってるのを、しかも『アベルが』言ってるのを、その上『俺に』、誰かに聞かれでもしたら、アベルが男を追いかけてるのがバレてしまう。

否、それでいいのか。

バレたら俺はヤツに絡まれることはなくなる。

否、相手が『俺』だったら良くない。

俺もゲイと思われる。

3つ並んでるベッドには誰も寝ていない。ドアはびったり閉じてるし、向こうに聞き耳立ててそうなヤツも、気配はない。外の五月蠅さなんか感じられないほど、ここは落ち着いていて静かで...

「誰も聞いてやしないよ。」

キョロキョロしてる俺にアベルは俺の行動がわかったのか、そう言って来た。

そう、たぶん、誰も聞いてなんかいない。

俺以外は。

誰も、俺と...アベルしかいないから。

そう。

2人きりだ。

思ったらとたんに、変な気分になった。

緊張してきたとか、決して言わないけど

.....似たヤツ。

なんでここは外とは違ってこんな静かなんだ。

アベルがこっちを見てる。

俺を。

俺だけを。

「な、なんだよ...」

.....また俺.....？」

鼻血出してんのか？

「いや。出てないよ。」

「よかった...」

これ以上血出したらマジで失血死しかねん。

今でも意識がぼんやりしてて、しっかりしてないんだ。

死に場所が保健室で、アベルの前で、死因が鼻血とか、俺ゼツテー天国なんかに行けやしない。

死んでも誰にも会いたかねーし。

そんで、俺ので笑い死にしたリーダが天国に行くのを地上で見守ってるに違いないな。

俺の哀れな姉貴の命のためにも鼻血死だけは、願ひ下げだ。

保健室。

「...そういえば、お前はこんな場所に俺といていいのかよ。」

「なんで？昼休みなのに。」

アベルは何を言ってるかわからないって顔だった。

「きっと今頃、アベルがカフェテリアにいないって噂になってるぞ。そんなもって、もしかしたら血まみれの俺を保健室に運んでたって噂までついてるかもしないぞ。」

有名人のアベルがいないっていうのは、一種のスクandalだ。

リーダとかの連中にとっての。

今頃リーダを含め、アベルファンクラブのヤツらがどこにいるのかって騒いでるに違いない。

「俺が怪我させたって？まあ、事実そうだから、噂じゃないよな。」

「そーじゃなくて。」

「いい機会じゃないか。これで皆俺とお前の仲を知るから、過ごしやすい。」

「誰がお前とゲイカップルだってアピールしながら毎日過ごさなきゃなんないんだよ！」

「俺たち付き合ってるんだ。」

ニッとアベルが笑った。

「(付き合って)無い！」

「無いの？」

「お前、ふざけんなよ。俺はゲイなんかじゃないんだからな。」

「ふざけてなんかないさ。心から真面目さ。昨日、お前と分かれる時にお前の話を聞くって言っただろ？その答えがこれかと思ったのに。つまり、付き合ってくれるのかって。」

ニコリと、この上なく魅力的な笑顔で、アベルは俺に笑いかけた。

その言葉に昨日俺の家の前であったアベルとのことをよく思い出して、胸がぎゅっと.....なんでもない。今言ったことは、忘れろ。

「ああ、言ったよ。聞くって。」

このアベルが『俺の話』を聞くなんか、冗談としか思えないけどな。

「しかもリーダもいた時にだ。あの後俺がどんな目にあったか。大変だったんだからな。お前のせいだ！」

「俺のせい？君の姉が出て来たのはお前が大声で叫んだからだろ？」

「なんだよ俺のせいなのかよ！昨日のことも、今朝リーダに牛乳ぶっかけられたのも！」

「それは.....酷い。」

「だろ？」

どれだけ朝から最悪だったか。

さっきも大量出血して。

なんて日だ。

今も会いたくなかったアベルと一緒にいて

.....昼休みなのに俺はコイツを独り占めしてて、リーダが逆立ちしたって無理な状況で、それは

...少し嬉しいけど。

「でも、友達だって言ったら、片付く話だろう？」

「言って片付くならとつくに言ってる。」

「言ってないんだ。」

「全部、お前に押し付けた。お前に聞けて言っただ。」

あの時の俺はなにか言えるような状況じゃなかったし、別にコイツと友達っていうわけでもないし、それをリーダに言うのがまずできない相談だ。

30秒真面目に話したらあとは喧嘩するってDNAが俺たちには組み込まれてんだから。

「俺が友達じゃないって言ってもいいんだ。1から話してやるよ。どうして出会ったのか、俺がどうしたのかって。」

「それは.....言うな。」

バレたら俺殺されるんだからな。俺が窓から首吊るされるか、庭のバーベキューグリルの上にさらし首にされてもいいっていうんなら言えばいい。

っていうか、お前彼女いるんじゃないのかよ。」

ふっと根本的なことを忘れてた。

思い出した。

急に、目が覚めるかのように。

コイツが非常に女にモテることも、

女に困ることが無いっていうことも。

リーダの日記によれば、覚えてるだけでも今まで3人...否4人か。そのくらいは、記憶にある。

なんで考えてもみなかったんだろう。

コイツに彼女がいないはずがなかったし、最初アベルは俺のことを女だと思って口説こうとして、俺は男だ。

面白いネタだからって、からかわれてたかもしれないって、一度だって、俺は考えたことがなかった。

脳タリンだからって理由は『却下』する。

...でも、自分でもアホだとは思う。

アベルは俺のそんな言葉に、じっと俺を見つめて来た。

ニッコリ笑ったまま。

いるよ、って言いそうなそんな感じがする。

なんかんだ散々否定してきたけど、正直に言う。

聞きたくない。

絶対落ち込む。

凹む。泣くかどーかはわからないけど、1週間は確実に凹む。

心に穴が空く。

だって、

コイツに恋してるから。

アベルは俺をそのままベッドに腰掛けさせた。

「横になってろ。なにかエサ持ってきてやるよ。セーチヨーキのお前に。」

「うるさい...。」

エサってなんだよ。

思ったけど、言い返すほど元気じゃなくなってきた。

それに、カフェテリアでウロウロ今の俺にはできない気がする。

「...肉が食いたい。」

アベルの申し出は、思ってるよりもいい考えだ。

「肉ね。そういえば、さっきの話。

俺今フリーだって言わなかった？」

「知らねーよ。」

リーダならまだしも、俺はアベルのことなんか、ちっとも知らないし、女子の彼氏持ちかいざ知らず、男の彼女持ちかイチイチチェックしてるわけがない。

俺は男だ。

ストレートの。

でも、フリーって言葉に胸が跳ねた。

何を期待してんだろう。

俺はアベルと付き合うつもりか？

そんな、まさか。

「フリーなんだ。昨日からね。

じゃあ、大人しく寝てろよゼノ。」

「！」

アベルは軽く俺にキスをして、ドアに向かった。

「あ、オイ！」

ビックリして、何が言いたいかわからず、アベルを呼び止めようと叫んだけど、ヤツは少し振り返ると俺を見て笑うだけで、ドアの向こうに行ってしまった。

残されたのは俺だけで、頭はクラクラしてて、胸はバクバクいっていた。

なにか悪い病気なんじゃないかって

.....本気で思った。

理科室。

俺は理解しない方がいいことを、理解してしまったかもしれない。

よくよく、アベルの言ったことを思い出して、考えてみたら、

『昨日からフリー』っていうのは、一昨日に彼女と別れたってことじゃんか。

一昨日に。

一昨日、

それは俺とアベルが会った日。

『本気だって、言わなかったっけ?』

保健室で言ったあのセリフの意味を……ひよっとしたら理解してしまったかもしれない。

元々別れそうだったのか、どーでもよく付き合ってたのか、知らない。

偶然が重なったのか、もしくは、……ヤバいくらいマジに俺にホレたのか、俺には別れた理由は知らないが、俺が何らかの形で分かれる理由になっ
てるってことだ。

メスがないとモノは切れない。俺がメスだ。

「早くよこせよ。」

「んだよ。ホラ。」

俺はなんだかよくわからん花の茎をメスで薄く切って、ガラスの上に乗せると隣のヤツに渡した。

俺の理科のパートナーってヤツだ。

運良く、コイツが成績良いヤツだったから、全部任して、俺はコイツの支持されたことだけやることにしてる。それだけで、成績はほぼ保証されてる。な
んてラッキーなヤツと当たったんだろう。

そう、理科の授業中だ。こんな変なこと考えてるのは。

そして、コイツは俺がそんなこと考えてるなんてこと、全く微塵にも気づいてないだろうな。

頭良いダケ。

「切るの上手いじゃんか。」

「そりゃどーも。」

俺のせいでアベルが、もしかしたら俺のために綺麗にフリーになったからって、なんだってんだ…。

くっつこうなんて、思ってなんかないってのに。

アベルの車の中。

俺はどうしたいのか、自分でもよくわからない。

とりあえず、アベルとは距離を置いた方がいいって思った矢先だっていうのに、帰りには俺はアベルの車の中に入った。

なんでって、家まで送ってもらったためだ。

頼んだわけじゃない。アイツが勝手に俺を乗せて...否、送ってくれるって言うから、それで、俺はそれを断らなかつただけだ。

理由は、頭がボーっとしてるのも、血まみれのシャツも、ヤツが関わってるから...だけのはずだ。

別に一緒に帰りたいなんか思ったりしなかったし、俺は1人で帰るつもりだった。

だけど、授業が終わった時に、あのお得意のいつの間にか開いたロッカーの扉の影に隠れてるアレで俺の前に現れた。

もうこれで...何度目だ。2回、否、3回は驚かされてるってのに、またスゲービビってしまった。

他の誰がやってもあそこまで驚いたりなんかしない。

アベルだからだ。

心のどっかで気になってるけど会いたくないって心の中で唱えてる相手だから。

部活は無いのか！

って言ってやったけど、無いらしい。

本当か嘘か、知ったこっちゃねえけど。

「今度ショッピングに行こう。」

横で運転してるアベルは前を見たまま突然呟いた。

アベルの運転は、ハッキリいって下手、じゃない。

欠点ってもんがないのかコイツには、人の話を聞かないっていうの以外には。

「何言ってるんだよ」

「いいだろ？モールに。なにか買ってやるから。」

突然、そんなこと言うアベルの横顔をまじまじと見る。

「俺はその辺の女子じゃないって何度言ったらわかるんだよ。男だ。女じゃない。」

あの女装は事故なんだって、いつになったら理解すんだよ。」

そう言うと、何がおかしいんだか、アベルはクスツと笑った。

アベルとの出会いは俺を女だと思って突然キスしたことから始まる。

男だってわかった今でも、その態度は変わらないし、ちゃんと理解してんのかよく不安になる。

「理解してるよ。その声聞いたら誰も女とは思わない。でも、買い物嫌いじゃないだろ？」

次の土曜にでも、いいだろ？」

アベルは随分こだわってるらしい。

俺とそんなに買い物行きたいってのかよ。モールのエキスパートのチアリーダーたちと行けばいいだろ。

「土曜は、友達と遊ぶんだ。」

毎週恒例ってやつだ。何するって決まってるわけじゃない。どっかん家集って、どっか行ったり、どっかん家でゲームしたり、そんなかんじ。

「じゃあ、日曜日は？」

あ？日曜日？

「日曜日は.....は、アレだ.....姉貴と——」

「映画観に行くとか言い出すなよ？」

「ハイキングだ。」

.....

とたん、アベルが大笑いするのを堪えたのがよ——くわかった。

俺だって有り得ねえ。

誰が姉貴と『ハイキング』だ。

ハイキングのハの字すらしたことなんか無いし。まず、ハイキングがなにか、イマイチわからん。

頭の中にあっただのは、最後の授業だった理科の白髪ジジイの最後の言葉だ。

最期じゃなく、最後な。

『それでは、また来週。ちと早いが良い週末をな。私は妻とハイキングに行くんだ。』

よく覚えてたもんだ。

週末にハイキングに行くのは俺とリーダじゃなくあのジジイだ。

「じゃあ、日曜日は。」

ハイキングに行くんだって信じるヤツがいたら、会ってみたいってくらい苦しかったのは俺でもわかってる。

アベルは日曜日の予定は無いって知って、そう笑いながら言った。

「違う。本当は日曜日はママの手伝いするんだ。バザーに出すっていう...クッキーの。」

「それも嘘だね」

「嘘じゃねーよ！」

嘘だけど。

ママがバザーにクッキー出すってのは嘘じゃない。あとケーキも出す。

「嘘だ。嘘じゃないにしろクッキー焼くのにそんな何時間もかからないだろ？朝教会行って、クッキー焼いて、それからだって遅くないだろ？じゃあ、そういうことで日曜日な。」

サラサラっと俺のスケジュールを立ててよこした。

そして、勝手に、日曜日一緒にショッピングすることになった。

そしてなにか言おうと思った時、前に少し体が傾いだ。

車が止まったから。目眩じゃない。

「着いたよ。」

窓の外を見た。

間違いなく俺の家だ。そういえば何も言ってなかったのに、道覚えてたらしい。

「ああ。」

俺はバックパックを掴んで、ドアを開けようと手を伸ばした。

「家辿り着く前に貧血で倒れたりすんなよ。そんなことされたら俺の心臓が止まる。」

横からそんなセリフが飛んできた。

こっから家まで何メートルだと思ってんだクソ。

「アホじゃねえ。目眩がただけで、別に俺は倒れてなんか——」

「心配してるんだ。」

言葉を遮ったアベルの顔は妙に近く感じた。

ずっと、車に乗ってから、向き合うことなんかなかったから。

いや、それだけじゃないかも。

真っ直ぐ視線が俺を貫く。

心臓が.....

「からかってるわけじゃない。じゃなきゃ、送ったりしないし、こんなことも言ったりしない。」

「ああ...うん。」

俺はアベルの視線から逃げられなかった。

吸い込まれるようなアベルの目に自分の顔が映ってるような錯覚すらするほど、俺はアベルの目を見ていて、ちゃんとした返事を返せなかった。

否、本当に俺の顔が映りそうなほど、アベルの顔は接近してきて.....

胸の中に何か異物でもあるんじゃないかってくらい心臓が何かで突かれてるように苦しくなってきた.....

そして、どうしてか俺はアベルを見たまま動けなかった。

アベルの顔と俺の顔の距離が段々と吐息がかかるほど、ゼロに近くなっていく。

唇が...

あと少しで.....。

背筋がゾクツとした。

「お、俺.....」

眩いた声はずいぶん小さかった。

ああ、もうすぐ俺はアベルと.....

って、待て。

「俺は平気だから。」

待て。

今、何しようとした俺。

ハッと我に返った俺はアベルの顔から少し離れて、ドアノブに手をかけた。

手が少し震えてたなんか、俺は『知らない』

「送ってくれてありがと、な。じゃな。」

ガチャッ

バンッ

心臓の鼓動が異常だったなんてことも、俺は『知らない』

少し脱力したような顔のアベルが車内から俺に手を振ったのに、振り返してる余裕なんかなくて、ただアベルを何秒か見るだけだったなんてことも...知らない。

俺は目眩とは別の頭真っ白の状況で、家のドアを開けて、家の中に入った。

バタン。

ドア越しに車の走り去る音が聞こえた。

その場に10秒くらい動けないで立ってたことも、理由も、俺は誰にも話すつもりはない。

玄関。

たぶん、耳くらいは赤かったかもしれない。ほんの少しピンク色くらいに。ちょっとだけ、大したことないくらいに。

否、顔が赤かった。自分でもわかったくらい。

家に入ったとたんそこからしばらく身動きがとれなかった。

怖かったとか、全力疾走で帰って来てしばし一時停止してわけでも、なかった。

でも、俺の心臓はその時くらいにバクバクいってて、顔が赤かった。

息切れしてたら、そういう場面に見えたかもしれないけど、生憎息切れはしてなかった。息苦しかったけど。

ああ、くそ。

頭の中はなにかよくわからない渦に巻き込まれてて、何も考えられなかった。

とりあえず体が自動的に自分の部屋を目指そうと動き出したのにただ従ってる、そんな感じだった。

叫ぶ声が聞こえるまでは。

「あら、ゼノ.....ゼノ!!!」

声にビックリして顔を上げると、廊下の先キッチンから顔を出したママの凄い顔があった。

目がまんまるで、俺が泥だらけで帰って来た時と一緒の反応と顔だ。

「どうしたの一体!!!何があったの!?!」

どうしたって?

何が。

俺は状況がよくわからなくて、一瞬呆然とした。なんとなく驚いて近付いて来るママから視線を外して自分を見下ろしてみても...

「ああ.....」

コレだ。

「血まみれで、誰の血?友達?知り合い?知らない子?犬?それともアナタ?」

少し取り乱してるママにビックリしながら、犬ってなんだよ、と心の中で呟いた。

いくら俺でも犬殺したり怪我させるほど質悪くないし、どっちかっていうと動物は好きな方だ。心外だ。

毎度のように悪戯してるからって.....

ちょっと悪戯のしすぎも考えものかもしれない.....とちょっと思った。

『濡れ衣』『狼少年』っていう単語が頭によぎったからだ。可能性に満ちすぎてて、輝いてた。

これは...よくない。

「俺のだよ.....ちょっとしたアクシデントで、勢いよく開いたドアに鼻直撃して鼻血大量噴射して貧血気味でちょっとフラフラしてたっただけだよ。」

簡単に言えば、そんなかんじ。そんな大したこと無いように聞こえる。

実際そこまで大したことあることじゃなかったけど、かすり傷っていうようなものではなかったし、俺はこれで色々大変な想いしたのはしたわけで。

「まあ、ゼノ。大丈夫なの?なんで連絡くれなかったの。迎えに行ったのに。」

「大丈夫だよ。友達にここまで車で送ってもらったから。まだちょっとボーっとしてるけど、歩けないってわけじゃないし、俺のシャツが死んだってことくらいだ。大丈夫じゃないのは。」

このシャツは、もう着れない。ゴミ箱行きだ。少し気に入ってたから、惜しいけど、血飛沫柄っていってもこれじゃリアルすぎて柄にもならない。着れるわけがないからしょうがない。

「車で?まさか無免許じゃないでしょうね?」

「違うよ。俺より3つも上だし、ちゃんと持ってる。」

あの時に、持ってたかどうかは知らないけど。家とかいうオチとかで。

「3つ歳上?そんな知り合い今まで聞いたことないわよ。」

ママは頭の中を探るように自分の記憶を探っていた。

該当するヤツなんかいないだろう。だってヤツとは一昨日会ったばかりだし、該当したとしたら近所に住んでるアベルと同じ学年のボンクラ数学オタクか夢は映画監督だとかアホぬかしてるもうブロック先のヤツくらいだろう。でも、アイツらと喋ったことすらないし、正直つるみたいなんて、もし事故らせたのがアベルじゃなくアイツらだったとしても、俺は車なんか乗らないし、ヤツらが車運転できんのかって疑いたくなる。

ママの口調と顔は、まるで危ない上級生グループとでもつるんでるんじゃないかって顔だ。

ヤクとかアルコールでアホになってるヤツらみたいなのと。

まさか、冗談キツすぎる。

俺の信用って、いったいどのくらいしかないんだろう。

確かに俺は自分で言うのもなだけけどアホで頭イイとはゼツタイに言えないし、近所の数学オタクのボンクラのようなことには全く関係のない生き物で、そっちのハイになってるアホ連中に繋がりそうな気はある。

でも、ちょっと悪戯好きで調子に乗ってたりするけど、そこまで信用無いなんて思ったことなかった。

俺は至って、普通のティーンエイジャーの男子のつもりだ。ちょっと勉強できない、って程度の。

どこもはみ出してない。真面目な時は真面目な。

「当たり前だよ。最近できたんだ。ほら、アイツだよ。アベル・ガーナー。今朝俺がリーダに牛乳ぶっかけられる理由になったヤツ。」

っていうかそもそもこの血ヤツのせいだし。

「アベル、って、あのアベル?」

「そうだよ。『あの』アベルだよ。」

ママは一瞬俺の言ってるアベルと自分の思ってるアベルがマジに一致してないって顔でそう言ってきた。無理もない。

俺だって先週の俺に会えたとしたら、同じこと言うに決まってる。アベルって、『あの』アベル？って。それくらい、ようは有り得ない話だけど.....有り得る話なんだよな。

「俺まだ本調子じゃないから部屋で休んでる。」

「ええ。もちろん、そうしてちょうだい。それと、後でアベルにちゃんとお礼言っとくのよ！」

「ああ。言うよ。」

これで、アベルは俺のママも認める俺の『友達』ってわけだ。

友達になるつもりなんかなかったのに、考えてみたら俺一昨日から毎日アベルと会ってないか？

俺の部屋。

人間って言うのは一体どのくらいの血液を出したら、死ぬんだろう。
半分？もっと少なくとも死ぬんだっけ？昔、誰かがそんなこと言ってたような気がするけど、全く覚えてない。
そして、一体どのくらいしたら血ってのは増えるんだ.....。

俺が大量出血してから、かれこれ、数時間。日は沈んで.....どうやら俺は眠ってたらしい。
辺りは真っ暗で、カーテンは開きっぱなし。俺はベッドの上にそのまま横になってた。

肌寒いと思ったら、血まみれになったシャツが見えた。脱ぐだけ脱いだみたいだ。俺は今パンツしかはいてなかった。いつも眠る時はパンツしかはかないけど、眠ろうとしてたわけじゃなかった気がする。

今、何時だろう.....。

ぼんやりする頭は、寝起きのせいとか、貧血のせいかわからない。

ただ、いつもよりなにか気だるいのは確かだ。重い感じがして...あんまり起きたくないような、そんなかんじ。

8:32

チラッと時計を見たら、そう書いてた。もう、ずいぶん夜だ。

エノ〜.....ゼノ〜〜！！

はあ、とため息をついた時、ふと耳にそんな声が聞こえて来た。俺を呼ぶ、ママの声が。

実は夢を見ていたっていうオチじゃなく、マジに。

夕飯食えって呼び出しかな...？

「ん〜〜.....」

なにか返事でもしようと思ったけど、随分寝起きな上に疲れてたらしい。何もゴロゴロした声しか出て来なかった。こんな小さな声ドアのすぐ外にすら届くはずが無い。

俺は枕に顔を突っ伏した。マジに起きるのが面倒だ。

「ゼノ！起きてるの？」

どう返事するか...そう思った時に、ドアのすぐ外でママの声をした。ここまで来たみたいだ。

俺が起きたってなんでわかったんだろう.....。

「.....きてるよ！」

俺は声を大きくして、伝えた。

ガチャッ

ドアが開いた。暗い室内が廊下のライトで薄暗く俺を照らした。

「あら、良かった。起きてたのね。」

「今、ちょうど起きたんだよ。」

「なら、なおさらよかったわ。ハイ。」

ママはなにか嬉しそうにそう言うと、持ってたものを寝起きでベッドに寝そべってる俺に押し付けて来た

「は？」

「じゃあね。あ、夕飯いるなら下りて来なさいよ。」

「ん...あ、ああ、うん.....。」

バタン。

辺りはまた、暗くなった。

な、一体何だってんだ。

俺は手元を見た。押し付けられたのは、『電話』だった。

.....え？

わけがわからない.....。

見れば、どうやら.....誰か俺に電話してきたらしい....。

誰だ....。

「.....もしもし？」

俺はそっと耳元に持って来ると静かに、耳をそばだてるようにしてそう言った。

「ごめん、起こした？」

「.....」

俺の動きは止まった。

「ゼノ？」

「な.....んで、俺ん家の番号知ってたんだよ...。」

ゴロゴロした声は小さくて、受話器越しでやっと聞こえるだろうって声だった。

けど、ヤツにはちゃんと聞こえてるみたいだ。

「調べた。さすがに、お前の携帯の番号までは、わからなかったけど。」

あー...アベルの人脈っていったら、俺の知るよしもないけど、凄いだっけ...？ぼんやり俺は思った。さすがにアベル崇拝者の俺の姉貴の日記からじゃ、ただ遠くから見てるだけの姉貴にそこまでの情報があるわけがない。けど、まあ、現に今耳元にアベルの声が聞こえてるんだから、俺の番号調べられるくらいには顔が広いだろうよ。俺より3年は長く生きてるし、学校にも長く通ってるんだから、知り合いの数競おうってのが変な話かもしれない。だって、コイツっていうのはただの生徒じゃなくて、有名人みたいなもんなんだから。セレブリティーだ。ここの学校のジョニーデップかブラッドピットってなも

んだ。俺だってそれなりに、（しよっちゅう校長室のお世話になってるっていうので）有名だけど、知ってるヤツっていうのは少ない。

「ご苦労なこって...。」

「今、つい、1秒前に起きたばっかだ。嫌なら切れ。」

「ちがう。」

「ならよかった。だとしたら、電話かけたのは随分タイミングがよかったみたいだな。」

「ああ、かもな。」

受話器から聞こえて来るのは、顔なんか見えもしないっていうのに、笑顔なのがわかるような嬉しそうな声だった。

俺と話してるから.....？

「今どこにいる？」

「俺の部屋だよ。ベッドの上。寝起きだって言っただろ。」

「俺はどこにいるって、聞かないの？」

「ん？.....あー.....どこに、いる？」

「別に、大したとこじゃないよ。お前と一緒に、自分の部屋のベッドの上。」

「~~~~~.....なんなんだよ。一体何の用だよ...。」

まさか、寝起きの俺をからかうためだけに電話かけてきたんじゃないだろうな.....。

まさか俺じゃあるまいし、いちいちからかい電話するためだけに俺の家の番号調べるなんて苦労しないだろうし。

電話越しにかすかに笑い声が聞こえた。クスクス笑うような。そんなアベルの笑い声が。

たまに俺に対してよくするような、あれだ。楽しそうで、俺はちょっとバカにされた気分になるアレだ。

「調子どうかなって、思っただろ。」

耳元でアベルの優しい声があった。どんな顔して、一体どんな状況で俺にそんなこと言ってるのなんか知らない。

今の俺みたく真つ暗な部屋の中、カーテンが開きっぱなしで外の街灯のライトがかすかに部屋に入って来てる中アベルの声だけ聞いて話してるっていう状況じゃないとは思う。

「そんなことのために、まさかわざわざ電話してきたんじゃないだろうな。」

「そうだ、って言っただろ？」

「明日にでも、学校で俺捕まえたらすむ話だろ。」

いつもするように、ロッカーに足音も無く近づいて。

「声が聞きたかったとかいう陳腐なセリフ吐くよりずっと立派な理由だと思うけど。何よりも、俺のせいなわけだし。実際、心配だったからこうやって番号調べたんだ。どう？まだ倒れそう？」

下の階か、もしくは1つ隣の部屋にリーダがいて、あのアベルからの電話がかかってきてるっていうのに、こんなにも静かで。

暗闇の中誰も邪魔しない状況で、静かに聞こえる俺に話しかけるアベルの穏やかな声は、寝起きだからか、そうじゃないのか、俺を落ち着かせる力を持っていた。いつものように何か文句言ったり撥ね付けたり、しようって思わない。

「それがいつもの手なわけ？怪我させて、送って、電話かけるって？今後の参考にさせてもらおう。俺がしたら途方も無く嫌われる気がするけど。」

だからか、いつものように睨んだりもしないし（現に相手が目の前にはいないわけだし）自然と俺は笑った。

「まさか女の子に怪我させるなんて、手なわけないだろ。もしそうなら俺は実行する前に自殺する。」

「でも、俺は男だけ？」

っていうか、俺が同じ事を女の子にしたら嫌われるだろうってことをされて、なんで俺アベルのことこれっぽっちも責めてないんだろう。

これで、そこまで憤慨しなかったとしても、嫌いだ近付くなって言っただけで撥ね付けられれば、もうアベルと関わることすら...

できなくて来たっていうのに....。

.....俺はしなかった....。

俺は楽しくヤツの声を聞いている。

「否、そういう意味じゃなく。あれは本当に事故だったんだ。今でも、ドアの前にお前が立ってるってわかってたら、って何度も思っただけで何度後悔しても取り返せないからこうして電話したんだ。」

そんなもん、わかってるよ.....。

「まだ、ぼーっとしてるけど...。帰ってすぐ寝て、今起きたんだ。寝起きだからかも。気分は悪くない。.....大丈夫だよ。心配すんな。ただの鼻血だ。大量の。」

俺がどうしてこうして電話を切らずにアベルと話してるかなんて理由だって、本当はよくわかってる。

「それはよかった。明日迎えに行こうか。」

「バカ言うなよ。そんなことしてみろ、リーダがどんなに騒ぐかわかったもんじゃない。」

朝に俺とお前の関係聞かれた時に、俺は牛乳ぶっかけられるんだぞ。そんな、お前本人が朝玄関先にいてみるよ。」

「だけど、後々わかることじゃないか。」

「な、...俺は別に——」

「俺とお前が知り合いで、『友達』だっていうことが。」

「あ...うん...。」

「俺は会った事もないお前の姉ごときでお前を諦めるつもりなんか無いし、そのためだったら何だってする。言っただろ？会った時に。」

一目惚れしたんだって。」

「お前、『友達』じゃないのかよ。」

「お前が言っただけじゃないか、お前の姉に俺たちのことがバレたらお前の命が危ないんだって。でも、俺は友達で終わるなんかゴメンだ。一目惚れしたとはいえ、最初は女の子だと思い込んでた。一目惚れして、その日のうちに彼女と別れた。けど、翌日実は男だってわかった。だけど、そんなくらいじゃ、というか、それどころか.....。

とにかく、お前に夢中だって、本気だって言った。それは嘘じゃない。」

たとえ楽しく聞いてたとしても、アベルの声は俺の耳に、体にそれほど良くはない。
俺が思わず言い知れない気持ちを吐き出すようにため息をついた。アベルに聞こえてないことを祈りつつ。
そうじゃないと、心臓が跳ねて、息が、とても苦しかったんだ。

「やっぱ、俺のせいで彼女とわかれたんじゃん...。」

「わかってたんだ。俺の今日保健室でサラッとやったこと。気づかないと思ってた。」

「脳みそ足りなくて、おまけに血液まで不足してるからって、バカにすんなよ。ちゃんと聞こえてた。」

頭にひっかかった。そして、言った意味を理解した。それどころか、アベルの言った言葉全部、ちゃんと覚えている。

そう言うときすと笑ったのが聞こえた気がした。

「俺は最初っからお前と友達やるつもりなんかないんだ。」

そうだろうな。

アベルのセリフで、元々別れそうだった彼女との関係を終わらせる言い訳みたいなものに使われたくらいなんだって、そう理解してたつもりだった。

けど、アベルがとってた俺への態度は最初から、今もなお、疑いようも無く本気だった。

真っ直ぐ見つめて来る視線も、真っ直ぐものを言うセリフも、全部が全部冗談で片付けられそうに見えるほど本気なんだ。

それを、たぶん俺は最初からわかってたから、わかりたくなかっただけで。

男だって気づいたのにここまで追いかけて来るのが、まず、そのいい証拠だ。

頭が逝かれたとしか思えないそれは、本当に俺に逝かれたんだって。

「でも、俺がお前に夢中で友達なんかじゃないっていうことは誰にも言わないことにするよ。

じゃないと、すぐにでもお前の姉の耳に入ってお前の命が危うくなるんだろ？」

「そーだよ。俺の体はキッチンに壁にキッチンナイフで貼付けにされた上に、首からは庭のバーベキューグリルの上にさらし首だ。俺のために俺から身を退くとか考えた事ないわけ？」

俺が女じゃないって知ったのに、彼女と寄りかかってもなく、全く身を退かないで俺を追いかけてくるんだから、アベルの俺への本気具合っていうのは、どのくらいなのかっていうのは、アホの俺でもわかってる気がするけど、俺は、アベルのことなんか.....好きなんかじゃないし、ホモになる気もなければ、アベルとどーこーなりたいわけでもない。

「考えた事も無いな。」

アベルは言った。

「どうしてかな、諦めつかなくて.....困ってるんだ。電話番号まで調べて、俺でもちよっと.....なんて言うか.....天使と悪魔がいて.....どっちも別のことを主張してるんだけど結局お前を諦めるって言う答えには行き着かないんだ」

俺の一体どこがそんなにいーんだらう。

アベルだぞ。あの。ほぼ学校中どころか学校外も含めて女を選べるような、そんなヤツが脇目もふらず見つめてるのが俺だってんだから.....俺も、困ってたんだ。

「それは困った。」

「お前の姉のせいだろう？それは。」

「そんなんじゃ...。」

「だって、あの夜に俺を煙たがる理由は姉だけだって言ったじゃないか。

そういえば、お前の例の『姉貴』は外出中？聞いている話だと、お前の命の危険とか言うくらいだから、今こう静かに電話できてるようには思わなかったんだけど。」

「あー、それ。俺も思ってたんだ。電話はママがここまで持って来たから、よく知らないけど、外出してないはずなんだよな。ドア蹴破って来てもおかしくないってのに...お前からの電話って知らないのかも。」

「なるほど。容易に電話もできないっていうわけか。」

「そゆこと。」

アベルからの電話だって知ってリーダーのやつがこんな静かなはずがない。ドア蹴破るっていうのは大げさな言い方じゃない。マジにリーダーのヤツならやりかねない。信じろ。ヤツならドアを蹴って開くんじゃなく蹴り『倒せる』。

「そうだ。電話した時にお前のお母さんに名乗ったら、お礼言われたよ。息子を送ってくれてありがとうって。話しやすい人だね。」

「ん、ああ。その.....アベル」

そういえば、ママにお礼言えて言われてたっけ。

「ん？」

「あの鼻血は、元はと言えば全部お前のせいだけど。送ってくれてありがとう...。」

「いいんだ。『全部』俺のせいなんだから。」

「否、正直言うと、フラフラしてて、帰るのがちよっと憂鬱になるくらいだったんだ。だから...感謝してる。」

想像するだけで家までの距離が途方も無く遠く感じて、その場に座り込みそうな、そんな状態だったんだ。

その時、なんでママに電話しようと思わなかったのかはわからないけど、その時にアベルが現れてくれたのは、珍しく凄く『いい』タイミングだった。

耳でアベルが嬉しそうに笑ったのが聞こえた。

「よかった。あの時にキスできてたらもっと良かったんだけど。」

「っ.....」

俺は言葉を失った。失っただけじゃなくて、あの時のことを、何一つ漏らさず思い出した。

空気も、雰囲気も、視線も、鼓動の速度も...全部。

キスする、本当に寸前までの、あの期待感と。

そして、車の窓越しに見たちよっと残念そうなアベルの笑顔と。

「あれは.....」

「あれは？」

きっと今の俺の顔は赤くなってるだろう。パンツ一丁の姿で少し肌寒いと思ってたのに、急にそんなこと感じなくなった。
全神経が耳に集って来たんじゃないかってほど、アベルの様子を全身が感じ取ろうとしてた。彼の反応が、息づかい1つでさえ、気になって。

「お前が勝手に、しようとしてきたんだ。俺はただ貧血でボーっとしてただけだ。」

「それは、全然気づかなかった。できたら、辿り着くまでボーっとしてほしかったけど。」

「変な事言うなよ。どれだけ長電話してると思ってたんだ。切るぞ。じゃな。」

ブツッ

俺はそう言って突然に、アベルとの電話を切った。心臓は動きを倍にして、血の巡りはとてもよかった。

いつもの半分くらいしか体に血が残ってなかったから、俺の心臓の早さっていったら、もう尋常じゃないってやつだ。

これだけ心臓が頑張ってるのはアベルのせいなんかじゃない。貧血で血が足りないせいだ。

俺はふうと息を吐いてベッドの上に大の字になった。

時計をチラと見てみたら、長電話どころじゃなく、10分も話してなかった。

あんなに長く感じたのに。そう思ったら、急にアベルと話してた時間が短く感じて来た。

あっという間だったような、そんな気分に。

別にアベルともっと話していたかったとか、そういうわけじゃない。

半分勢いで電話を切ったのは、確かだけど、別に……。

ぐう~~~~~.....

気が抜けるような音が静かな部屋でよく聞こえた。

昼に聞いた覚えのある、音だ。あの時も昼飯を食いそこないそうだった。そして、今は夕飯を食い損ないそうになってる。

電話を下に持って行かないといけない。

起きるのが面倒だったけど、一気に起きないといけない理由がたくさんできてしまった。

キッチン

「ママ。夕飯残ってるよな。」

服を着て（もちろん血まみれのじゃないヤツを）下の階に降りて行くと、キッチンでママを見つけた。

「ええ、もちろんよ。今日誰が一番栄養とらないといけないかっていうと、貧血のあなたなんだから。」

「んー、わかってる。」

俺の心臓は、急に速度を上げた。

「なに、アンタ夕飯の席にいないと思ってたら、貧血なわけ？生理中？」

「ちがーう。誰が生理中だ。アホか。」

そこにはリーダもいた。ママは俺のために夕飯を暖めるためにキッチンをウロウロしていた。

リーダはキッチンのサイドテーブルにテーブルの上には宿題のノート、携帯電話、マグカップ（まだ湯気が立ってるところからしてここに来てそれほど経ってないとき）とクッキーの乗った皿。宿題より携帯電話のメールがメインってところろ一な。

どうせ、友達と今日も、アベルがあーだこーだって.....

ああ、そうだ。アベル...

どうやら、この調子だと電話のことも俺の貧血のことも何も知らないらしい。

「え、違うの？」

「出る穴もないのに出るわけないだろ。」

「うわ、ちょっと。やめてよね、そういうこと言うの。」

リーダは顔をしかめた。

「誰が言い始めたと思ってんだ。ちょっと、事故って大量出血しただけだよ。」

「じ、事故で大量出血って...！あんた、大丈夫なの？」

急に驚いてマジな顔になったリーダはそう聞いて来た。

なんだかなんだ、俺の血のつながった姉には違いないらしい。

「それはもう、簡単には説明できない、酷い事故だったんだ。事故にあった時には何がなんだか...気づいた時には血まみれで」

俺は悪夢を見たような険しい顔でそう言った。

「え、大丈夫なの？今家にいるんだから、平気ってことよね？」

とたんに、心配げな顔のリーダ。いつもこのくらいならいいのに。

「ああ。でも安静が必要なんだ。なんたって俺はかろうじて——」

「ただの、『鼻血』よ。開いたドアに勢い置くぶつかったとか。ただ、ちょっと出血の度合いが異常だっただけで。」

「あ〜、もう。ママ。」

スパッとよこしたママの横やりに、リーダの顔はみるみる内に.....。

無言でリーダはテーブルの上に置いてあったノートを引っ掴むと、こっちに投げて来た。

バシッ

「イテッ」

「信じ・らんない！！」

「い〜じゃん、別に俺が死んだり入院したりしてなかったんだから、喜んでくれたって。」

「死ねばいいじゃん！！」

「ひっで〜！！なんだよ、ソレ。さっきはあんだけ心配そうだったくせに。」

「心配して損した分、死んでわびなさいよ！！」

「なんだよそれ！！冷血！！悪魔！！魔女！！これでも一応俺は怪我人なんだ——」

ブルルルル.....

「から...。」

ブルルルル.....

電話が鳴った。ママはすかさず電話をとった。電話の子機はキッチンにあるからだ。

「ハイ、カリガリスです。...ああ！...あら。...ええ、今ここにいるわよ、待ってちょうだい。」

なんだか楽しそうに話すその雰囲気はリーダに用って感じた。

俺とリーダはママが謎の相手と話してるのを見守っていた。

受話器を持ったママが振り返って見たのは、『俺』だった。

へ？

「あなたに電話よ、ゼノ。」

「は？」

リーダじゃなくて？

「は？じゃないわよ。アベルからよ。アベル・ガーナー。さっき言い残したことがあったんですって。」

ああ、ヤバ.....

「アベル・ガーナーナーナー！？！？！？」

鼓膜粉碎するほどの声を上げたのは、言わなくてもわかるよな。

リーダだ。興奮のしすぎで最後のガーナーの部分はもう金切り声だ。勘弁しろ。

「.....なんの...用？」

刺すような視線に串刺しにされながら、俺は恐る恐る耳に受話器を持って行って、そして怖々そう言った。

別にアベルを怖がってるわけじゃない。

この状況と姉貴のリーダに恐怖してんだ。

「.....すごい声だな.....さっきのが」

「ああ、そうだよ。例の...ホラ、俺の.....アレ、ティラノ・ザウルス？」

思わず俺まで語尾の声がひっくり返った。

姉とは言わない。ヤツが自分のことを話しているとわかったら、さらに大変な事になる。っていうかもうすでに、俺は外に避難したい。

どんだけ危険かっていうと、ジュラシックパークのティラノそのもんだ。あのちっこいヤツじゃなく車追いかけて来るティラノ。

「で、なんなんだよ、言い残したって。」

「ああ、急に切っただろ？だから、言いたくも言えなかったから。『おやすみ』って。」

「.....それ、『だけ』のためにまたかけてきたのか？」

なにかコメントしようがないって、コレだ。

「そうだけど？」

呑気な声が耳元で聞こえる。俺は全くもって呑気なんかじゃない。蛇に睨まれたカエル、否、ウルヴァリンに睨まれた猫だ。

この電話を切った後に、平和に何事も無かったかのように夕飯にありついて、自分の部屋に戻れるなんてこと、全く思わない。

「ちょ.....お前、俺の状況考えて——」

「じゃあ、明日携帯の番号教えてよ。」

「わかった。教えるから。」

「よかった。約束な。」

「ああ。もういいだろ？切るぞ。」

あまりこの状況を終わらせてリーダと対決するのは気が進まないけど。

「わかったよ。ああ、もう1つ言おうと思ってた事が、」

「なんだよ！」

「『好きだ』。じゃ、また明日。『おやすみ。』」

ブツツ

「あ.....おう.....また...。」

アベルは俺の耳に熱く残る言葉を残して切ってしまった。

こんな、恐怖のティラノザウルスが虎視眈々と電話を切るのを狙ってたっていう状況で。変な事言うんじゃねーよ.....。

アベル信者が俺の事締め上げようって時に、聞こえてないとはいえ『好きだ』なんてことを.....その弟の『俺』に.....。

ああ、ヤバ。

冷や汗みたいなものを感じた。

「ゼノ————！！！！ちょっと、どういこと~~~~！！！！説明しなさいよね~！！！！」

リーダの...

マジ信じらんない。マジ信じらんない。マジ信じらんない！！

マジでわけわかんないことが私の周りで起こってる...！！これは夢か何かだって、後でドッキリだとか、そんなこと言われた方がマトモってくらいに、信じらんないことばっか。マジ誰かどうなってるのか私に教えて！！！！

あんまりにも急なことだから、私はなんだかわかんないし、どーしていいのかもわかんない！

だけど、どーやらこれは夢じゃなくて現実みたい。私の最悪な悪の根源であるあの弟のゼノが、私の愛しいアベルといつの間にか知り合いになってたっこと！！

どうしてあのゼノがハンサムでゴージャスで、全く接点の欠片もないアベルと知り合いなわけ？これが夢か幻じゃなきゃ、悪い嘘かなにかしか考えられないじゃない！！

なのに！！！！なのに！！！！昨日、家の前にアベル・ガーナーがいたの！！！！私の家の前に！！！！

それだけじゃない。今日、家に他の誰でもなく、あのアベル・ガーナーその人が『電話』かけてきたの！！マジ信じらんない！！

あのアベルが『私の』家に『電話』！？！？考えただけで心臓が止まっちゃう。

私にとってはジョニー・デップが間違い電話かけてくるよりも信じらんない最高なこと。それが現実起こるなんて！！！！

なのに、『さらに』マジで信じらんない事は、これは間違い電話なんかじゃなくて、私じゃなくて『ゼノ』のバカにかかってくるってこと！！！！

一体どうなってるの！？

知り合いだからって家に電話かかってくるわけ？？

昨日はなんで家の前にいたわけ！？家の前にいた理由っていうのは、ゼノだし！！どうして一緒に、しかも夜に私の家の前に...

まあ、ゼノの家でもあるんだけど、いるわけ！？今までずっと知り合いだったなんか、有り得ない。

私が見てないし、気づかないなんて有り得ないんだから、最近知り合ったに決まってるのに、一緒にいたり、それどころか電話かけてくるって、ただの知り合いなわけ！？

もしかして、ゼノのバカがなにかアベルを困らせてて、アベルは仕方なく彼に従うしかないっていう状況なのかも！？

だったら、説明がつく。だって明らかにあの2人に接点なんか全くないわけだし、だってあの救いようの無いムカつくバカと輝く星よりも輝く優しいゴージャスのアベルなんてあんまりにも違いすぎる。

平民、否、奴隷と貴族、否、王族くらいに違う。廊下でぶつかって何かあったとしたって、ゴメンってアベルが謝って、あのバカは突っかってアベルに迷惑かけるくらいしか考えられない。それだけで、知り合いだとかアベルの記憶に残るようなことがまず無い。

でも、なぜか家の前にいて、そして電話がかかってくるって、どうやら今日鼻血で貧血とかいう究極のバカだったあのクソバカは『アベルの車』で『アベル』に『送ってもらった』らしい！！！！

なんなのあのクソバカは！！！！！！！！！！なんでそんなことになってるの？私なんか彼とほんの少ししか話したことなんか無いのに...！！わけわかんない！！なんで、よりによって私が世界一犬嫌いなゼノなわけ？！！！！

ゼノに聞いても断固として全く何も答えようとしなないし、これは絶対にゼノが彼の弱みか何か握って困らせてるかなにかしてるに違いない！

だって、いくら優しいアベルだからって、こんなムカつく救いようのないバカにこんな優しく世話焼く理由も義理もないんだから。なんてヤツなの！？よりによって私のアベルをからかう対象にして、最悪って言葉じゃ表現できない！！

どこまで私をイラつかせたら気が済むあの最悪の弟は！！！！！！！！

信じらんない！！マジで！！！！絶対聞き出してやるんだから！！！！

これはこれは.....良くない。非常に、良くない。

俺はリーダの部屋で、リーダの鍵付き日記帳を読んでた。

俺がダイヤル式の鍵のコンビネーションを知ってる事をリーダは知らない。というか、毎日のように日記読まれてるなんてこと、気づいてやしない。

なんで読んでるのかっていうと、フツーに読んで面白からだ。勉強はそこそこできて、偉そうに振る舞ってる俺の姉貴。

日記は自分の妄想や理想も絡まってアホ極まるってかんじで、マジ面白い。それと、嫌がらせ半分。

でも、俺がアベルと接点持ってしまった上に、.....上に.....その、何.....一目惚れされて唇奪われたあげく.....その.....俺もアベルのことが.....気になって.....その、しまった以上、（どもるな俺。）アベルがどーのこーのあーだこーだ書いてるのをせせら笑えなくなってきてしまった。

俺とアベルがただの知り合いだとか、友達だったら、リーダのヤツが熱狂的にアベルファンである以上面倒くさいとはいえ、そんな問題は無い。

だけど、困ったことに、そういうわけじゃない。

知り合いではあるし、友達だって言えってアベルが言うからには『友達』だし、事実電話かけてくるようなくらい他人じゃない。

だけど、俺とアベルの仲には、リーダに知られたらいけない部分が存在してる。

どうして出会ったのか、どうして電話をかけてきたのか、そしてどうしてアベルがこうも俺の周りをウロウロ急にしだしたのか、リーダに何も言えない。

リーダがアベルがどーのこーの書くのは、今までは端から見る気分だったけど、他人事じゃなくなってしまった。

これは、良くない。

なんで、俺はよりによって男ってのはこの際置いといたとして、アベルに一目惚れされてしまったんだろう。

これがアベルじゃない他の男ならいいのかっていうと、そもそもどっか間違ってるけど、単純に答えるならyesだ。

なんでアベルなんだ！！！！

日記のリーダに叫びたかった。
それは俺のセリフだ！！

学校。

俺は生まれてこのかたずっとリーダという姉貴と攻防戦を繰り返して来た。
まあ、リーダには戦う意思があるわけじゃなくて、俺に仕掛けられるからどうにかこうにか防ぐうちに巻き込まれてるって言った方が正しいのかもしれない。

「ただ、もう今じゃそんな経緯なんか関係ない。知っての通り、服は隠すし、顔に牛乳ぶっかけるし、ノートは投げつける。そんなこと、今に始まったことじゃないくらい、俺たちの戦いの歴史は長いんだ。」

「だから、今更、今更こんなことされたって屁でもねえ...」

「って言いたいけど...けど.....ああ.....もお.....」

困った.....。

「どうしたんだよ、浮かない顔して。まるで今日の朝食が当たったみたいな顔してるぞ。」

ため息をついて、何度か自分のロッカーのドアに頭を打ち付けてると、友達のトロイがやって来た。

俺の一番の友達、ジェイの友達だったヤツだ。今じゃ、関係無く俺の友達だけだ。

いつもつるんでる3人の友達の中じゃ一番付き合いが短いかもしれない。っていうのも、そこまでトロイのことは知らなかったりする。

でも、俺と一緒に姉貴がいて、いいヤツだっていうのは知ってる。

他は、俺よりモテるってことくらいかな。

俺がモテないって言ってるわけじゃない。顔も悪いとか言ってるわけじゃない。俺は顔も良いし、性格は、ちょっといたずら好きかもしれないけど。前にも言った通り、俺の最大の欠点って言えばちょっと年相応に見えない顔くらいなものだ。

ちょっとガキっぽいついていうか、まあ、やってることもガキなのかもしれないけど、とにかく。

そして、このトロイが俺よりモテるって言ってる決定的な点は（俺の次に）見た目がいいだけじゃなくて俺にないものがあるからだ、年相応の顔と、それからファッションセンス。たぶん、これだ。

トロイってちゃんとした名前があるってのに、覚えようとも思わないらしいリーダが『アンタの友達のくせに格好だけはいい友達』って呼ぶくらいだ。3人いる俺の友達を区別するのにそう呼ぶんだから、きっと俺たちの中で一番格好がいいんだろう。

アクセサリーを多めに付けてても、全然嫌みにならないのがトロイだ。それだけファッションには強いかもしれない。

ん？ああ、容姿の話をしてなかったな。

トロイは、そうだな...まずブロードヘアだ。明るいいかにもブロードっていうブロードヘアじゃなくて、ちょっと焦げ茶色と緑を足したようなくすんだ絶妙な色をしてる。俺よりも長めの髪で、毎日上手くセットしてくる。寝癖みたいに見えないけど、きっちりしてるわけじゃないっていうかんじの。少なくとも、寝起き手櫛で整えたとかじゃなくて、しっかり5分は鏡の前で髪と毎日遊んでるだろうっていう髪型。

背は俺と大して変わらないけど若干センチの差でトロイの方が高い。

俺の身長？聞いて驚くな、174センチだ。チビとか言うな、クソ。

トロイの目の色は、グレイブラウンってかんじで、これもくすんでる絶妙な色をしてる。

髪は興味無いけど、さすがに目は綺麗だと俺だって思う。

で、ちょっとだけたれ目だ。きりっとした眉の印象でたれ目なんか思わないけど。

だからか、それほどキツイ印象は持たなくて、どっちかっていうと優しい印象を覚える。

だからか、ちょっとだけつり目の俺はキツイ印象を与える時がままある。確かに優しいけど。

まあ、トロイの紹介はこのくらいでいいだろう。

「食あたり？そっちのがいい...。」

ガンッと額をロッカーのドアにぶつけたまま俺は呟いた。

「どうしたんだよ。何かあったのか？」

心配そうなトロイの声に、俺はため息をつくしかなかった。

「姉貴に、リーダに俺の携帯盗られた。」

「はあ？」

口ぽっかり空いたトロイの顔は見ないでもわかった。

そう、俺がロッカーにヘディングしてたのはなにもサッカー部に入部したいからとか、そんなんじゃない。

リーダに携帯を盗られたからだ。

「警戒心持たなかった俺が悪いんだ。悪いんだけど。」

「つい、なんだかんだ言っても俺の姉貴には変わらないから...」

「リーダに携帯盗られたことはわかったけど、順を追って話してくれよ。じゃないと、さっぱりだ。」

トロイは俺の背中を軽く叩いて、俺の額をロッカーから引きはがすと自分の方に向かせた。

俺があんまりにも死んだ顔してたのか、随分トロイは心配そうな顔で俺を覗き込んでた。

まあ、心配するよな、友達がブツブツ言いながらロッカーにヘディングしてたらさ。

言葉通りの『頭』じゃなくって、中身の方の『頭』を。

「あれは、午後の最初の授業が終わって、俺が平和に廊下を歩いているときだった...。」

遠い目をした俺は、語り始めた。

物語を語るように。

ブツブツと。

ブツブツと。

ブツブツと...。

数時間前

俺は、昼休み後にある最初の授業が終わって、次の授業、今日の最後の授業の用意を取りに行くために自分のロッカーへ平和に歩いてる時だった。

「あー！！ゼノ！！いいとこにいた！！」

その大きめの声は、確実に俺に向けてのもので、そしてよく知ってる声だった。

リーダだ。俺の恐怖の姉貴。

「なんだよ、俺は急いでんだ。」

普段、姉弟とも思われたくもないから、近づくなって自分から言ってる姉貴だけに、俺は肩間にしわをよせて遠目に見るだけで通り過ぎようとした。しかし、リーダはその行動を読んだかのように走りよって来て腕をつかんできた。

「こっちも急いでるのよ！ゼノ、お願い。」

「...んだよ...。」

その困った顔につい足を止めて、リーダに向いてしまったのがいけなかった。俺の態度にホツとしたように俺から腕を放すと、

「さっきの授業にクラスメイトに辞書貸したんだけど、次の授業でも必要なのよ！」

「俺に辞書貸せて言っても無駄だぞ、持ってねーもん。」

頭足りん俺こそ辞書が必要だ、なんて姉貴のリーダは言うだろうけど。（余計なお世話だ。）

今の所俺のとってる授業で必要ないから持ってなんかない。

「そんなのわかってるわよ。そうじゃなくって、貸したクラスメイトが中にいるのよ。」

リーダはおもむろに男子トイレを指差した。

「なに？おネエのクラスメイト？」

「ちっがうわよ。バッカじゃないの！？」

「じゃあ、中でお楽しみ中？」

「そんなわけないでしょ！男子トイレなんだから男子に決まってるじゃない！男子に貸したの！！」

「ああ、なんだ。」

そう答えたら、盛大にため息をつかれた。

なんだよ、俺が何言ったってんだよ。困って俺に頼んでくるっていうんだから、そのくらい可能性を考えてもいいだろ？

「ああ、もう時間が無いの。だけど、トイレからなかなか出て来てくれないのよ！！このままだったら遅刻しちゃう！次の授業、ずっと無遅刻無欠席で通してるのに！！だから、ゼノあんた男でしょ？中に入って返してもらってきてよ！！お願い！！ホラ、荷物持ってあげるから！ね！」

「.....わかったよ...。」

リーダがあんまりにも困ってるから、荷物をひったくられた俺はしぶしぶ男子トイレに向かった。

中に入ると、目的の男はすぐに見つかった。

なかなか出てこないって言うから、てきり個室に籠ってるんだと思ってたら、そうじゃなく普通に外にいた。用をたしてたわけでもなく、ただ、そこにいた友達と話してた。出てこないはずだけど、こんなところで喋らずに外で喋れよな。女子じゃあるまいし。

2人は俺を見て話をやめると、辞書を持ってる1人が俺に気付いたような顔をして俺が近づくの見ていた。

「姉貴が辞書返して、だって。」

俺は辞書を持った男に手を出して指を少し動かして催促した。

それを見た男は笑顔で辞書を俺にわたした。

「わかってるよ、ほら。君がリーダの弟だね。」

「そうだよ。」

「髪の色がそっくりだ。」

「ああ。しょっちゅう言われるよ。じゃな。」

俺は受け取る物を受けて引き返した。コイツら授業は急がないでいいのかよ。

俺だって急いでるし、リーダなんか半泣き状態だっていうのに。

そんなことを思いながらドアを出て、待ってるリーダに辞書を渡すと

「ありがとう、ゼノ！！感謝してるわ！！あんたも急ぎなさいよ！まだ遅刻しないで間に合うわ。」

「おう...。」

ひったくるように辞書を持って、代わりに持っていた俺の荷物を俺に押し付けると小走りに去って行った。

俺の返事なんか、全く聞こえてなかったろうな。

俺も急がないと、

とトイレのドアから2人が出てくるのを目の端に映しながら自分のロッカーへ行こうとした。

その時だ、なんか妙に感じたのは。

辞書を持った男が俺を見るとニヤッと笑いかけてきた。

なんだ？と見返すと

「一体何の企みだったか知らないけど、遅刻するぞカリガリス・ジュニア。」

「ナニ？」

カリガリスは俺の名字だ。

肩間にしわをよせてる俺をよそに、俺に手をふるとさっさと廊下を歩いて行ってしまった。

企み？

誰が？俺が？別に何も企んでねえし、今は。

確かに俺はいたずらでしょっちゅう校長室に行ってるだけに、ちょっとだけ有名だったりする。きっと、だからかもしれない。また何か悪巧みでもしてんのかって思ったんだろう。

そろそろ俺も本気で急がないと遅刻しそうになってたから、小走りに自分のロッカーに急いだ。

その間、どうもさっきの言われたセリフが気になってしょうがなかった。

その時ふっと妙な点に気がついた。

トイレでいた2人は、どうも誰かを待ってたような感じで話していた。っていうのも俺を見たとき勝手に話をやめた。

俺のこと知らないはずだし、だったらよっぽど周りに聞かれたら不味い話をしてない限り気にせず話続ける方が自然だ。

まあ、トイレで話すってんだから、不味い話って可能性は上がってくるだろうけど。

何より、俺は知らないのに、向こう特に辞書持ってた方は明らかに俺を知ってたし、その態度はどこか俺を待ってたようにも感じた。

『君がリーダの弟だね』

と言ってた。ということは、誰かから聞いて知ったってことだ。でも、実際には俺を見たのは初めてだったって口調だ。

でも、なんで知る必要がある？

リーダの辞書を借りてんだから、リーダの少なくとも知り合いなんだろう。

だけど、勉強できる生徒で通ってるリーダはバカな弟の存在を話そうなんかしないし、周りが話すってことも少なそうだ。

だったら、どうして…。

その時、リーダが俺をトイレに向かわせる時に俺の荷物をひったくったのを思い出した。

たかがそこまで分厚くもない辞書取りに行くだけに、片手で抱えられる荷物なんか邪魔になんかならない。

考えてみたら、その行動があんまりにも、不自然だ。

まさか。

そこまで思って、さっき言われたセリフが頭の中を巡った。

『一体何の企みだったか知らないけど、遅刻するぞカリガリス・ジュニア。』

企みって、まさか、リーダの！？

だったら、合致がいく。俺の荷物を無理矢理ひったくったのが。

冷や汗が流れた俺は、その場で持ってた荷物を確かめた。ひったくられたってことは、何か盗られたか細工されたかに決まってる。

もはや遅刻とか言ってる場合じゃない。

普段それほど俺のいたずらに頭来た時以外、それほど仕掛けてくるなんてことのない姉貴だけに、油断してた。

ここ最近アベル事件のせいで頻繁に反撃してきてるっていうことを。

「あああああー—————！！！！」

俺は叫んでその場で固まった。

通りすがりの誰もが俺を振り返ったけど、そんなことどうでもよかった。

何をされたのか、わかった。

俺の携帯を、盗られたんだ！！！！